

目 次

釋尊の降誕を慶讃して(其三)……………日生上人
本尊講草(承前)……………野口日主師
人生と學生時代……………小林さくみ
法華經講話(第十八講)……………小林一郎
記事

○本部團報各地教信 ○『皇道と日蓮主義』に對する世評
○寄附團費誌料領收 ○新刊紹介

第十四年六月號

統

一

法聯
人團
統

一團
發行

財團統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見シ 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法勳

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シテ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ調達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ實質ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラシム事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ實質シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方テ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方テ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方テ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

釋尊の降誕を慶讚して (其三)

日生上人

四、釋尊降誕の意義

さういふ有難いお釋迦様の降誕せられた日であるから、吾々は釋尊の高徳を追慕してこの聖日を慶讚した次第であります。さうしてその有難い意味合の考へ方はいろいろありますが、それに就て纏つた考へ方をお話して置きたいと思ふ、從來は法華經ばかりが佛様に就て眞實の事を説いたやうに言はれて居る、それも親方であるけれども、法華經の教のやうな意味合は他のお經も皆有つて居るのである、法華經だけがお釋迦様の尊い事を説いて、他のお經は説かぬといふやうなものではない、法華經で説く意味合は他のお經でもやはり考へて居る、たゞそれが完全に説き了つて居るのである、法華經は完全説といふことに外ならないのである。それはどうしても明かにして置かなければならぬ大事な點であります。寧ろ一切經は壽量品に向つて朝宗して居るものであつて、その壽量品の教旨は釋尊の絕對を説くものである、一切經は釋尊を慶讚せざるもの無しといふのが本當の親方であると思ふ。各宗も釋尊より離れては佛教でないのだから、降誕會に相集つて釋尊を慶讚する、この思想をば三百六十五日捨てること

の無いやうに、如何なる場合に於ても釋尊の前に合掌禮拜する心持を捨てないやうにすることが佛教徒の心得であると思ふのであります。

法華經に於て特に釋尊の勝れた事が説いてあるといふのは何であるかと言へば、壽量品に於て一番善い事が説いてある、それは釋尊の顯本といふことであります。顯本といふのは今のお釋迦様は始めて佛に成つたのではない、迷つて居る悉達太子が出家の後、行を積んで覺つたのではない、悉達太子として現れて来る前からの佛である。跋提河の邊りに入滅を示したけれども、それつ切り消えたものではない、今も現に在りまして吾々を護つて居られるといふ、過去に、未來に、實在不滅の本佛で在らせられるといふことであります。その意味もボンヤリするやうになつて「たゞ法華のみがえらいのだ……」と言つたのでは意味を成さない譯である。法華宗が威張るばかりで法華經の精神を蹂躪してしまつて、他のお經は皆いかぬといふことになれば、一遍に佛教は破産してしまふ。法華經が有難いといふことはお釋迦様に就ての尊さを徹底的に説いて居る點であるが、その徹底的に説くといふことはどういふ事であるか。それは今言ふ通りに今度始めて佛に成られたのではない、涅槃されても消え去つたものではない、實在常住の佛、モット簡單に言へば今もチャントお釋迦様が此に護つて下されて居るといふのである。一切の救済の力、一切の功德の力はこの釋尊を中心にして來るのである、何も觀音様に頼まなければならぬか、阿彌陀様に頼まなければならぬといふやうなことはない、さういふ他の佛のいろ／＼の名前なども

皆釋尊の中に攝取されてしまつて、一切の佛の名前は釋尊の中に綜合される、一切の力は釋尊の力に統合されて、吾々は釋尊の絕對の力に對して信仰を捧げる、その心が何處にも散らないやうに教へられて居るのが、壽量品に於て説かれて居る事ナンであります。

さうするとさういふ根本の觀念はどのお經に於ても同じ事になつて居るのである、たゞ説き方の完全不完全は無論あるけれども、常識から考へても、同じ偉大なる釋尊の説法の中に於て、法華經だけが價値があつて他は全然價値が無いといふやうな事のあるべき筈がない。それを「壽量品々々……」と言つて無暗に威張るやうなことを言ひながら、法華宗の者が壽量品の意味も忘れてしまつて、「自我得佛來」の「我」とは自分の事だとか、いろ／＼屁理窟を言つて講釋する、そんな事を言ふくらゐならば、何もやらないで常識に委せて置いた方が寧ろ宜しい。佛教を信するくらゐの者の常識ならば、お釋迦様が迷つて居つて、今度始めて覺つたといふやうな事を考へて居る者は無い、やはり尊い佛が人間を救ふが爲に出て來られたのちやといふ所から御降誕と稱して居るのではないか、「降誕」といふことは何であるか、迷つて居る者が始めて覺るならば御降誕といふことは謂はれない、御降誕といふのは本來覺れる者が人生を救ふが爲に魂を人間界へお降し下されたといふことを言うて居るのである、「降誕」の二字を考へたゞけでも、下手な法華宗の者よりズット考がうまく行く譯である。常識で考へてもさうであるお釋迦様が悉達太子の時分にはまだ迷つて居つて、所謂モダン・ボーイであつたけれども、それがいろ

いろ戀愛關係か何かで發心して山に入つた……そんな事を言ふ者は何處にも居りはしない。

それは阿含の方から考へても、釋迦菩薩といふものは兜率の内院にお在でなかつて、三祇百大劫の永い修行を積んで、今度最後の成道の爲に悉達太子となつてお出世になつたのである、三祇百大劫の菩薩の成滿に於て出られたといふのが一番佛教の中の低い説き方である。低いと言つても三祇百大劫と言つたらなか／＼永い、その高遠なる菩薩の成滿の境であると言ふ、常識で言つても「釋尊はこの世の人を教ふが爲に淨飯王、摩耶夫人の間に悉達太子として御降誕下されたのだナ」といふことを考へなければならぬ。そんな事も考へないで法華宗がたゞドンドコ……鬼子母神や、帝釋や……とやつて居る、それが何になるか實に佛教徒の常識だにも有たないものである。だから今の法華宗の輩は、釋尊の御降誕會などを喜ばないかも知れぬ、帝釋様の御開帳とか、毒消のお祖師様のお開帳と言つたらワ／＼出て來るけれども、釋尊の御降誕會を有難いと思ふ者は割合に少いかも知れぬ。これは實に恐しい事である、法華經を捧持すると言ひながら法華經の大精神を没却してしまふやうな者を許して置くとは出來ない。故に吾々は命を懸けて法華經の御爲に、又日蓮聖人の御主張の御爲に奮闘をしなければならぬといふのはその點である、相當わかつて居ると思ふ法華の宣傳者の中にも、この點に力を入れる人が割合に少ないといふことは實に慨歎に堪へない事である。

五、華嚴經の讚佛

そこで阿含經さへもさういふ譯であるが、今華嚴經に依つてこれを證據立て、見ようと思ふ。どのお經にもあるけれども、澤山のお經を悉く紹介することは時の許さない事であるから、華嚴經に依つてさういふ佛教の思想を考へて見たい、法華宗はたゞ法華經が善い／＼と言ふばかりで、本當の善い所を忘れて居る、阿含經にも及ばぬ、華嚴經には勿論及ばぬ所を、法華宗の僧俗がガタ／＼やつて居るのである。華嚴だからと言つて今の法華宗のドンドコ信者が考へて居るやうなものではない、釋尊に對する態度といふものは實に立派なものである。「イヤ阿含はつまらない、華嚴はつまらない、」それではお前はどうか、「俺は何も知らない」……それではあまりに巫山戯て居ると謂はなければならぬ、その法華宗の無態な現狀を證明する爲に、今華嚴經に依つて證據立て、置かうと思ふ。

華嚴經の初めに「世主妙嚴品」といふのがある、その中に澤山の菩薩や天部の方々が大勢集つて、皆一々お釋迦様のこの世に御降誕下された事を讃歎し奉つて居るのである、それがどの位數があるかわからぬ程であるが、皆釋尊がこの人間の前に御降誕下されたのが有難い、その有難い意味は斯うであると言つて、ちようどこの降誕會の講演のやうなことを澤山説いて居る、この華嚴經と相對して、釋尊の御涅槃なされる時分の御禮の言葉が涅槃經に現れて居る、これは始めと終りと相照して居るものである。初めにお禮を言ふのも、後にいろ／＼の事を聽いてからお禮を言ふのも、どつちから言つても同じ事である。たゞ生れた切りで何にも爲さなければ、それは騙される譯であるが、生れた時に有難いといふ

のは、それから後になさる事を豫想して居るのである。だから華嚴經と涅槃經とは相應して佛徳を讃歎することに於て至れるものである。華嚴經の釋尊出現に對する感激、涅槃經の釋尊一代の行動を感謝したる言葉といふものは能く味はつて、それ等を皆纏めて法華經の壽量品に於て佛の絶對の尊さを見て行かなければならぬものである。

イ、照世の妙法燈

そこで華嚴經の『世主妙嚴品』の中には斯様に申して居るのである。

『佛身語の大會に普徧し

法界に充滿して窮盡無く

寂滅無性にして取るべからず

世間を救はんが爲に而も出現す

如來法王世間に出でて

能く照世の妙法燈を然す

如來の智慧は無邊際なり

如來の功徳は不思議なり

衆生見る者は煩惱滅し

普く世間をして安樂を獲せしむ

如來清淨の妙色身

普く十方に現じて比有ること無く

如來の音聲限礙無く

化を受くるに堪へたる者は聞かざる靡し』

これはどういふ事かと言へば今言ふ通り華嚴經と雖も、佛様といふものは迷つて居つて今度始めて覺つたといふやうな事を言ふのではない、佛様は今はこの娑婆世界を救ふが爲に出られて居るけれども、法

界に充滿して窮盡無く、この全宇宙の到る處にも活動してござる方である、娑婆世界の人を救ふが爲に法界に活躍して居る尊き御佛が人類の間に御降誕下さつたのである。さうしてこの釋迦如來が世にお出ましになつた事は、この人世を照らすところの妙法の燈を然して下されるのである。「能く照世の妙法燈を然す」——妙法といふ語も法華經に限る譯ではない、一切の佛敎の敎を皆妙法と名けて居るのである。さうしてさういふ敎の燈をお與へ下さつたが、その佛の御智慧といふものは限り無く廣大無邊のものである。又その御功徳は測るべからざるものであると言つて居る。この佛の御功徳の測るべからざるといふことが非常に大事な事である。お釋迦様に頼んでもうまく行くまいから鬼子母神様に頼みに行つたり、帝釋様に頼みに行つたりするといふその考は非常に間違つて居る、御利益といふものはその人の有つて居る功徳が力になつて出て來るといふのが佛敎の敎である。頼んだら何でも叶ふといふ譯には行かない。ちようど錢を溜めて居る人の所に行つて子供が「お父さん、百圓ばかり貸して貰へませぬか」「貸してやらう」といふので、親父が銀行なり郵便局に預けて居る金を出して貸して呉れる、ちようどそれと同じやうに溜めて居る功徳があるから救ふことが出来る、如來の功徳測るべからざるものであるから、吾々の功徳の無い者が釋迦如來にお頼りして救つて戴くことが出来る、それを言ふのである。その如來の功徳といふことを十分に意識しなければならぬ、日蓮聖人は本尊鈔の中に「釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足する」と言ひ、或は「佛大慈悲を起して妙法五字の内に此の珠をつゝ、

みて」と言はれた、此の珠とは功德なりと始終私が申すのはそれである。それを何か冷たい眞理や理窟
みたいな事だと思つて居つてはいかぬ、理窟や眞理では吾々を救ふ力にはまだ縁が遠い、そこでこれが
如來の功德であると言ふのである。南無妙法蓮華經の中から御利益が出て来るのは、釋迦如來の有つて
ござる功德力が南無妙法蓮華經の語を通して吾々を救つて下さるのである、その場合には南無妙法蓮
華經は銀行の通帳みたやうなものである、預けてあるといふその功德は釋迦如來の有つてござる財産で
ある、その通帳ばかりを有難く思つて、親が汗を流して金を積成したその親の有難さを知らないやうな
のが今のドンドコ法華である、さうして「ナンミョウク」と言つて銀行の通帳ばかり振り廻して居る。
「妙法五字の内に此の珠を裏みて」といふ功德が預けてあるから、その銀行の通帳に認印を捺せば百圓
の金になつて出て來るといふ所にお釋迦様の有難さが現れて居る。そこを咀嚼して教へない限りには、
將來の宗教としては法華宗といふものは成立たない、たゞ迷信を助長するに過ぎないものである。その
事は華嚴經に於てはハッキリして居る、「如來の智慧は無邊際なり、如來の功德は不思議なり」と言つ
て居る、さうして一切衆生はこのお釋迦様にお眼に掛つたわけでも煩惱の罪といふものが消える、一人
が消えるばかりではない、「普く世間をして安樂を獲せしむ」この釋迦如來の御徳が人生に及べば、人
間の社會國家といふものは平和安定を得るのである、そのお釋迦様の妙なる御相といふものは非常に立
派なお身であつて、さうして普く何處の世界へでも身を分けてお出ましになる、三十二相八十種好の美
る。

さういふ風に釋迦如來の本身といふものは法界に遍滿して居る、人生を救ふが爲に出て來て、世を照
らす妙法燈の教の燈を然した、その燈明の智慧は限り無く、功德は測り無く、これを見る者は煩惱を滅
し、世間も亦安樂である、さうして如來の相は美を盡せるものである、如來の音聲も柔軟の御聲である
といふ風にして佛を讚歎して居る。この意味が法華經の提婆品なり、壽量品に現れて來る佛身讚歎の意
味と少しも違はないのである、たゞ少し淺い深いの相違はあるけれども、下手をやれば法華の方が華嚴
に負けてしまふ。法華宗の者が確に經文の意味も研究をしないでまご／＼して居るから、完全説と言つ
てもその完全説の四分の一も了解して居らない、經は如何に完全であつても僧俗の信解が不完全であつ
た時に於ては、華嚴の讚佛偈に及ばないことになる、たゞ手に法華經を握つて威張つて居つても、それ
に依つて自分の頭腦に信解が成立たぬ限りに於ては何にもならぬ、そんなものを以て宗派ナンといふこ
とを認めることは出来ない。如何なる團體があつたところが、皇室なら皇室に對する考へ方に依つて、
又親なら親に對するその考へ方に依つて違ふのである。親孝行の團體ちやと言つて親孝行を看板にして
印半纏にまで「親孝行」と書いて着たからと言つても、その人間が少しも親を有難いとも思はないとい

ふことになつたならば、そんな馬鹿な事はない。純潔なる感激の精神が釋尊に對して起つて、所謂行住坐臥、顔を洗つても、道を歩いてても、佛様の尊い事に感激して、殊に釋尊降誕の日などに會つたならば、『今日はお釋迦様のお生れ下さつた日である、これがあるが爲に一切衆生は救はれたのである』といふ氣分が漂うてこそ、佛教を尊信して居る者ぢやといふことが言へるのである。(次續)

主師親を忘れたるだに不思議なるに、刺へ親父たる教主釋尊の御誕生御入滅の兩日を奪ひ取つて、十五日は阿彌陀佛の日、八日は藥師佛の日と云云。一佛誕入の兩日を東西二佛の死生の日と成せり。是れ豈に不孝の者に非ず耶、逆路七逆の者に非ず耶。人ごとに此重科は有つて而も人ごとに我身は科なしと思へり、無慚無愧の一闍提の人なり、法華經の第二卷には主師親の三の大事を説き給へり、一經の肝心ぞかし。

一日蓮華人下山抄

本尊講草

(承前)

故野口日主師

六、本尊坐列

中央 南無妙法蓮華經

- (1) 本佛釋尊久遠證得ノ本法ノ故ニ
- (2) 在世ハ音顯 今ハ書顯ノ故ニ
- (3) 四句要法 本佛別付ノ要法故
- (4) 八萬四千教法王ノ故
- (5) 是好良藥 皆悉具足ノ故

(1) 南無釋迦牟尼佛
正本尊ノ實體本主也

(2) 南無多寶如來

寶淨世界ノ佛 證明佛
經云、出大音聲 善哉々々
或過去佛 不來佛ノ代表

(3) 十方分身諸佛
多寶如來ノ助證
撰法華經
十方分身ノ諸釋迦牟尼佛

(4) 南無三世諸佛
今ハ時間的ニ
中心本佛ヲ證スル也

(5) 南無善德佛

不來佛ノ代表

迹佛ノ代表

觀普賢經

靈 曰善德

弘安已後ニハ多分ノヲ列テス

醇要ト廣博ノミ

(6) 南無上行四菩薩

六萬恒沙ノ最上首菩薩也

就中上行ハ第一也

日蓮聖人ノ本地身也

經云、身皆金色三十二相 無量光明

(7) 南無文殊 普賢菩薩

迹化四士

迹化無量 上首也

智惠菩薩故 八萬上首トシテ 法華經ノ始ニ居

セリ

善 賢 一經ニ門ノ乘趣ヲ結ヒ 四法順行ノ導師也

諸佛護念

植諸德本

入正定聚

發救一切衆生之心

文殊ノ師子ハ

百獸懼伏 智惠無畏ヲ表ス

普賢ノ六牙白象ハ

慈悲清淨 六牙ハ六度ヲ表ス

藥王菩薩

流通分ノ對告衆 天台智者ノ本地身

彌 勒

釋尊ノ補處菩薩

他ハ他佛ノ弟子 娑婆來入ノ菩薩也

(8) 舍利弗 目連 二乘代表

(9) 梵天 帝釋

梵天ハ三界統御ノ天主也 外道 此天ヲ本尊トセリ 佛ノ臣下ト爲ス

基督教 回々教 猶太教ノ本尊 皆 此天也

法華經 化城品

十方五百千萬億世界諸梵天王 救一切大梵天

王 大悲一切大梵天王 妙法一大梵天王

彼ハ單一的 獨一眞神

此ハ複數的 獨一眞神

帝釋天王

人界守護ノ天 忉利天住

大日月明星天王

人界守護 正法護持ノ誓アリ

天照太神ハ 此神ノ實現也

撰時抄

日本國ト申スハ天照太神ノ日天ニテマシマス

故也

序 品 日天子 寶光天子

月 名月天子

明 尾 普光天子

大日天王

釋尊 日 種

國名 日本

聖祖幼名 善日曆

宗 祖 日 蓮

日 子 日 女

日ノ因縁深重也

第六天

正法守護

轉輪聖王

阿闍世王 人間界ノ上首

四方征服 統一王

無量義經 六種ヲ出セリ

大轉輪王

小轉輪王

金輪王

銀輪王

銅輪王

鐵輪王

菊章ノ輪寶

天照太神ヲ本尊中ニ容ル意 深甚々々也

畧

鬼子母十女神
訶梨天女 法華守護神
騰亂說法者 頭破作七分

○天照 八幡大菩薩

八百萬神ノ上首
吾國 第一ノ神 八幡大菩薩 百王守護ノ神
内武ノ神
高橋抄(神國王書)
日本國ノ王トナルハ 天照太神ノ御魂ノ入りカ
ワラセ玉フ王也

○不動 愛染

外護神
不動ハ 怨敵退散
愛染ハ 煩惱降伏

○天台 傳教
外用相承

遣使 通告 (本化)

一、三大秘法ノ本尊

本尊
題目
戒壇

三、一念三千ノ本尊

一念三千ヲスリカタキ立タル本尊

四、十界圓具ノ本尊

五、諸佛統一ノ本尊

○日蓮大士

末法宗主
三寶本尊ノ意明也

要ハ

佛力家ノ十界也 三千也

◎第二章

内容多義

一、三寶一具ノ本尊

經文

我實成佛已來 (佛)
是好良藥 (法)

甚深 妙義

吾人ニ
國家ニ
世界ニ

事 現

菩薩行

圓浮統一

人類 平和 幸福

南無妙法蓮華經

大正八年八月廿八日

日 主 華 押

人生と學生時代

小林 さくみ

春——四月ともなれば新しい帽子に金釦の光もに
 ほやかな風爽たる學生さん達が、折からのプラタナ
 スの若芽とともに、學びの首途に軒然として、そして
 頼母しい朝らかなさを街行く人に感せしめる頃です。
 男女に拘らず、この時代の嬉しさ、樂しさ、得意さ
 は、生涯を通じてさう幾度もあるものではございま
 せん、若し學生がこの時代の純真な氣持と、恵まれ
 た生活態度を持続したまゝで卒業が出来ますものな
 ら、世間的には學生時代ほど幸福な時代は恐らくあ
 りませんでせう。

然し複雑多岐な人間の社會では、私どもが念願す
 る「人間一生の平安」はあつか、學歴三四年の短

時日に於てすら、不慮の波瀾が起りがちなのです。
 今日選ばれて學園の人となつた悦びが、彼等の上
 に再び卒業の榮光となり、更に進んでは社會人とし
 て就職せられるか否やに就ては不吉なことながら、
 多分に危惧の念を抱かすには居られぬ状態ござい
 ます。若し目出度卒業されることが保證されてゐる
 としても、その就職の問題に於て、私どもが今現に見
 せつけられてゐるあの血みどろな戦ひに克つて、果
 して幾人の勇士が凱旋されることでございませう。
 あの新しい學生の幾パーセントかゞ經濟的に或は健
 康上の理由から落伍するのであらうことを思ふと、
 僅か千數百日の間に人生に不變化を許さざる無常を

教へられ、悦びと明朗とに背を合せた憂鬱なはかな
 さを感するのでございます。況んや「卒業はしたけ
 れど」の蒼白いインテリゲンペンが年と共に累進的
 増加を示し、希望も抱負もない若き無神論者の一群
 が社會の一隅に蠢めいてゐる有様を思ひますとき、
 毎年のこと、春ともなれば、幼きは小中學生から大
 學生に至るまで、この人達のゆく手に無限の感慨を
 宿さすには居られません。



「學生時代」の短日月、何の苦勞も知らずお茶に
 シネマに、ダンスに、麻雀など、凡そ世の享樂の機
 關は我等學生の爲めに在るものなりと心得るやうな
 學生もあり、或は近頃流行の「學生蘭堂」となつて
 有閑不善マダムに玩弄されることを唯一の光榮と感
 ずる人もあるとか、或は全然これに反し、書齋と教
 室と圖書館と研究室とに學生時代を消費する篤學の
 學生もあり、さては生活費と學費を我と我が腕より

稼ぎ出し、己が骨も命も摺り削つての強行勉強をし
 てゐる學生さんもあります。例へば帝大新聞（四月
 二十三日號）に

苦學の東北帝大生

恩人遺族を救ふ

總長も感激・學生の模範

純情の一東北大生が舊恩人の遺族五人を抱
 へ苦學力行生活線上を行く近頃での美談
 が知られ、過般本多總長も痛く感激、金一
 封を送りその篤行を激賞した。

美談の主は同大學法文學部二年内館新平
 君で、岩手縣の貧農の家に生れ、小學校を
 出ると共に苦學のスタートを切り、先づ宮
 城縣佐沼町の牛乳店牧夫に雇はれ、苦學の
 佐沼中學五年間を了へ、弘前高等學校に入
 ると、當時盛岡電鐵に勤める千葉俊彦氏に

認められ學費を仰いで昭和七年卒業、東北大に入學した、ところが千葉氏が急逝後には夫人はじめ遺族四人はその日の糊口の資にも事欠く始末、これを見た内館君は千葉氏の知遇に奮恩忘じ難く、遺族五名を直ちに引取り、爾來四年間通學の傍ら朝は未明に起き出て牛乳配達を爲し、午後三時まで講義の後、更に僅かの報酬を得て家庭教師を勤めるなど遺族を支へ生活に抗して粒々たる辛苦を積んでゐる。

と云ふ記事が載つてゐました。
凡そこれを以てしても學生社會ほど多種雜態の社會はありません、然しこの呑氣さうな學生時代こそ人生に於ける最も重大なる時期でありまして、生かすも殺すもこの時代に於ける運命の支配如何ではないてせうか、恰かも私は學生時代は人生の生養であると思へます、何れは運に上る運命を持ちながら、

又、趣味、娯樂、社交等に關しては、喫茶店、カフェー、ダンスホール等所謂軟派に屬する方面に入する者は一九三〇に達し、全學生の四割弱に當つて居ります、次は流行の映畫、一六〇〇、音楽一四〇〇、園藝、一三〇〇、種球、二六〇、麻雀、二一〇等の順であります、この部門に對する考察は蓋し學生々活の學校以外に於ける私生活の實相を知り得るものと考へられます。

斯くて學生の保健上の問題に於ては、右の統計の必然的結果として宿病を持つ者は實に一千名、その他現に消化器病、耳鼻科疾患、神經系統、痔疾、脚氣等の順に病氣を持つた學生があるものであります、その總数は驚く勿れ全學生の約四割弱が病人である

と云ふこの事實です、洵に學生の體質低下の實狀に愕くと共に國民保健上深憂に堪えぬものがござい

料理人の抄網の使ひ方で時間に遅速があるだけ、又中には逃げ出すものもあるやうに。

最近東京帝大の學生課で學生の生活調査を行ひ、五千四百二名からの申告に基いて興味ある統計を發表いたしました。

その内「各自の崇拜する人物は誰か」の問に對し、西郷隆盛——二五五、ゲーテ——一三二、キリスト——一〇五、東郷平八郎——九九、釋迦——九三とあり、それから吉田松陰、カント、乃木希典、日蓮、野口英世、親鸞、リンカーン、トルストイの順序で數字を示して居ります、これによつてみると、大體上學生の崇拜する人物傾向、乃至信仰の狀態が窺はれるのでございます。

次に酒、煙草に於ては、禁酒してゐる者、三〇八〇、酒を飲む者、二〇八〇、煙草を喫せざる者、二六〇〇、煙草をのむ者、二七〇〇と云ふ數字を示し

先づ、私どもは生質の魚に十分餌を與へねばなりません、學生が剛健なる身體と共に質實健全なる精神を宿し以て將來に雄飛する爲めには、母たる者の家庭に於ける無言の教化の偉大性を自覺することが必要であります、無心な子守唄に涙する青年は、母の恩愛に無條件で感謝してゐるのです、母の眞劍さの前には「お母さんは古い」とは云はせませぬ、學生時代こそ、母と子と、そして國家の爲めに實に重大なる時代であります。

小林一郎先生
法華經講話 第三輯 新刊

定價 金五拾錢 送料六錢
○第二輯は賣切れました

貸別荘

- 一、場所 茨城縣大洗海岸
- 一、間敷 八、八、四半、三、湯殿付
- 一、賃 其他御照會は左記へ

東京市品川区南品川二丁目四一三

鈴木 木

電話高輪一五八九番(呼出)

只今がクリーニングの絶好期

移りかばりのお召物は

日蓮主義の當店を

御利用下さいませ

小峰洗染所

日本橋區小傳馬町三ノ五
電話浪花四一八番

汚れものは

一品でも清浄に

御報次第參上

病氣は不潔・不衛生から

法華經講話

(第十八講)

小林 一郎

妙法蓮華經方便品第二 (其二)

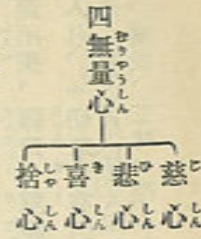
前回には方便品に入りまして、その初めの方に、釋尊が、佛といふものゝ徳を説かれる、その半ほどの所まで讀んだのであります、今日はそれに續いて、また「舍利弗よ」と呼びかけられるのであります。

舍利弗、如來の知見は廣大深遠なり。無量無礙力、無所畏、禪定、解脱、三昧ありて、深く無際に入り、一切未曾有の法を成就せり。

(舍利弗、如來知見、廣大深遠、無量無礙、力、無所畏、禪定、解脱、三昧、深入無際、成就一切、未曾有法)

佛様の智慧の力を以て、總ての物を照し見るといふこのはたらきは廣大深遠であつて、モウ有ゆる物のことを知つて居らつしやる。又遠い昔から遠い後の世まで掛けて、末の末の事までも能く見透してお在でになる。廣大深遠といふ言葉の中には、空間的に言へば際のない遠くまで、時間的に言へば遠い昔から遠い後の世まで、スツカリ、縦横兩方に亘つて居るのであります。

「無量」といふことは、前にも申しました四無量心を具へることでもあります。四無量心といふのは



この四つの心で、これがそれ／＼數限りない、殆ど普通の人間が想像が出来ないやうな大きな力を有つて居りますから、それで無量心と言ふのであります。

「慈心」は、自分が生きて居ることに依つて周囲の人の幸福を増したいといふ心持。これはモウ際限が無い。一人でも多くの人の幸福を増したいのであります。それから「悲心」は、自分の存在することに依つて周囲の人の苦しみを除いてやりたいといふ心持。これも際限が無い。一人でも餘計苦しい事を除いてやりたいのです。それから「喜心」は、人の幸福を飽まで一緒に喜んでやりたいといふ心持。これは凡夫であると、人の不幸を希ふやうな間違つた心持もある。又人があまり幸ひがあれば嫉んでその邪魔

をしたといふやうな心持も起りませうが、佛様はそんなことはない、皆が喜ばば飽まで俱に喜んでやるといふこと。「捨心」は、自分が今まで骨折つた事に對して報ひを求めたくない。又人が今まで悪い事をして居ても、それに對して前の事は忘れてやらうといふ心持。斯ういふ慈悲喜捨の四つの心持は、有ゆる人間の上にその力が及ぶので、その功德は洵に「無量」であります。此處に「無量」とありますのは、その四つの無量心と言ふのであります。次に「無礙」とあります。これも四つの無礙があるものであります、すなはち

法無礙
義無礙
辭無礙
樂說無礙

これを四無礙と申します。佛様が教をお説きになる時にはこの四つの無礙が揃つて居る。第一に「法無

「法」法といふのはお説きになる教の内容で、それが極めて完全無缺なことであつて、誰にでも當嵌まる教である。教といふものに依つては、甲の人には當嵌まるけれども、乙の人が聽いては役に立たぬといふやうな教もあるが、佛様の教はさういふものでなくして、これは絶対の眞理ナンでありますから、誰でも佛様の教を聽けば有難い、老人も子供も、金の有る人でも無い人でも、どんな人間でも佛の教に依つて益を得ない者は無い。ですから法無礙と言ふ。即ち佛のお説きになる教の内容は礙りが無い、誰にでも當嵌まるやうな教である。

それから「義無礙」その教のいろ／＼な説明の仕方が洵に完全である。例へば人に情けを掛けなければいけないかと言ふ。何故情けを掛けなければいけないかと言へば、それは斯ういふ譯で情けを掛けるのだといふやうに説明をされて、その筋道をズツト説かれる。その立てられる理由、説明が洵に完全無

礙であつて、誰も納得するやうであるといふのが、義無礙であります。

この事は今日のやうな時代には殊に必要であります。私なども少し頭に白髪が生えて、老人の仲間入りをするやうになりましたが、老人になると、若い者に對して理窟を言はないで教を與へたくなる。「親に孝行しろ」と言ふ。若い方はわからぬから「何故孝行するのですか」と言ふ。その時にそれを納得するやうに説くのが面倒臭いから「當然ぢやないかそれがわからぬでどうするのだ」といふやうに、押つけてしまふ。「日本は世界で一番善い國だ」と言ふ。「何處が善いのですか」「何處が善いつたつてそんな事のわからぬ奴があるものか」といふやうにやつてしまふ。老人といふものはつひさうなるので所謂獨斷で行きたがる。獨斷といふものは理由を示さない。「日本に生れて日本の有難いことがわからぬ筈はない。」ときめてしまふ。「子供として親に孝

行の出来ない筈はない、「斯ういふやうにきめつけてしまふ。これは私共も時々やるですけれども、今の若い人にはなかく、それではいかぬ。世の中が複雑で面倒ですから、理由がわからなければ決して従はないのです。そこでその獨斷をやつて居るといふと今度はそれに對して懷疑といふものを起して来る。疑ひを懐く。今親父と息子と仲が悪いといふのは大概それである。親父の方は獨斷で行く「なんでも日本が有難い」と言ふ、息子の方は「なにが有難いか譯がわからない」と斯うなつて来る。それでどうも一致しないのです。人間が皆悪いのではないけれどもどうも年取つて来ると獨斷になり易い。若い人は兎角疑ひを懐き易い。

そこで困ることは、若し獨斷に對して疑ひを懐くといふことになる、疑ひを懐くだけでは濟まない疑つて居るだけなら宜しいけれども、疑つて居るだけでは人間といふものは濟まない。疑ふといふのは

どつち附かずの状態ですから、それでは濟まない。疑ひから何處かへ行く。それが恐いのです。疑ふだけならまだ「宜しい。けれども疑つてばかりは居られないでせう。人間が生きて居るといふことはこれは疑ひではない。御飯を食べる時に「これが飯だかどうだか疑はしい」或は「これを呑み込んで思して腹の中に入るか入らないか疑はしい」などと思つたら、飯一杯食べられるものではない。だから人間は、口では疑ふ「と言ふけれども、人間の生きて居る一舉一動といふものは疑はないことを示して居る。私が今斯ういふ高い所に立つて居る。この床が混疑士だか石だか知らんが「これが硬いか硬くないか疑はしい、斯うやつて立つて居つてブク」と下に潜つてしまふだらう」ナンと思つたら、斯うやつて立つて居られはしない。すべて人間の生きて居るといふことは疑うては居られない。「疑はしい」と大きな聲を出して言つても「その疑はしいといふ

聲が人にうたがはし……と聽えるかどうか疑はしいなどと云へば聲も出ない譯です。どうしても人間は疑ひだけでは居られない。

昔羅馬時代の話ですが、歐羅巴のクリート島といふ、これは地中海にある島であります、この島の人は能く嘘を言ふので有名になつて居る。そのクリート島の人が羅馬にやつて来て、或る家を訪問して「私は嘘吐きですヨ」と言つた。所がこれを聞いた人が考へて見ると、サアわからなくなつてしまつた嘘吐きだと言ふのだから、今言つたことは嘘だらう今言つたことが嘘なら、「嘘吐きだ」といふことは嘘ナンだから、本當の事を言ふ筈だ、本當のことを言ふとすれば、今言つたのは本當だらう。今言つたのが本當だとすれば「嘘吐きだ」と言ふのだからやはり本當に嘘を吐くのだらう……何がなんだか譯がわからなくなつてしまつた。どうも「嘘吐きですヨ」といふ言葉はどう解釋したら宜いか、頭を抱へて困

つてしまつたといふ話がある。さういふやうなもので、人間が疑ひを出したら、疑はしいといふ言葉も疑はしいといふことになつてしまつて、何の事やら譯がわからない。それで人間といふものは、結局疑ひだけでは濟まない、生きて居る以上は、疑ひを通り抜けて新しい道に行きたいのであります。

そこで多くの人は、その疑ひの中からどう行くかといふと、破壊に行くか、便宜に行くか、そのどちらかに行くのです。一つは破壊です「疑はしいからやめてしまへ」となる。若い人は大概これへ行きまです。疑ふといふ事と、やめるといふこととは別の事です、疑ふのは、やつて宜いか、やつて悪いか、それを疑ふのですけれども、併しその疑はしいといふ状態ではどうもまどろこしくして仕様がなから、それで疑ふといふ所からモウ一步進める。さうすると今度は破壊といふことになる。「日本の國は尊いかどうか疑はしい」「だから日本を有難いと思はない」

ときめてしまふ。「親に孝行して宜いか悪いが疑しい」「だから孝行はやめた」といふやうに、疑ひから更にモウ一步進んで破壊になつて行く。それから破壊に行かない方の人はどうなるかといふと、便宜といふ方に行く。便宜といふのは「わからぬけれどもそれにして置かう」といふので、これは大部分の人がさうです。「日本の國が有難いかどうかわからぬけれども、マア有難いとして置かう、その方が通りが宜いから……」「親に孝行して宜いか悪いかわからぬけれども、マア孝行と言つて置かう」といふのが多い。大概世の中を通過つて四十になり、五十になり、少し頭の真ん中でも禿げ掛つた人は、大概此處へ行く。「疑つても仕様がなから便宜でいゝ加減にして置かう」といふ。すると又これが對立する。若い方は「壊してしまはう」といふ一方は「イヤ、いゝ加減にして置かう」といふ。これが對立するのであります。世の中を見ると多くはそれである。な

んでも獨斷的にやつたのに對して疑ひが起つて、その疑ひの結果壊さうといふ方と、いゝ加減にして置かうといふ方とある。さうすると茲に碌なものはない、少しも誠心を以て心から深くやらうといふ者が無い譯であります。

それでありますから獨斷でもいかぬし、懷疑でもいけないので、そこで正しき信念の上に立つて、健全な眞面目な心持を立てなければいかぬといふ必要が起つて來るのであります。それが無いといふと、自然の儘に委して置けとなつてしまふ。親父は獨斷でやる、息子は疑ふ。その息子が少し暴れ者であれば破壊に行くし、氣の弱い息子であれば、便宜で以て「親父の生きて居る間親父の氣に入るやうにして置かう……」それでお終ひになつてしまふ。これはどつちもいけないので、皆世の中を壊すものです。

それですから獨斷ではいけないので、今茲に義無礙とあるやうに、その理窟をチャンと明かにしてや

らなければいかぬ。「たゞ何でも有難いと思へ……」：それではいけない。何故有難いか、「日本の國が世界で尊い」「何故尊いか」その筋道を確り立て、誰にでも呑み込めるやうにしてやらなければならぬ。それをたゞ獨斷的に押し付けるといふと、その結果は今申したやうないろ／＼の悪い結果を生じて來る。それで佛様はいつでも義無礙で、道理をよく明かにする。何故信心をしなければならぬか、何故お前達は人生に於て善い事をしなければならぬか、正しい事をしなければならぬかといふ、その義といふ、意義、道理を、納得の行くまで十分完全に教られる。これが必要なのです。

獨斷でやつて居ることは、或る時代になつて來ると理窟が欲しくなるのですから、その理窟が欲しくなつた時に理窟を教へてやらないと、今の親父なら親父の言ふことが獨斷になつてしまつて、それに對する疑ひが起つて來る。何事でもさうです。自分達

は長い間の習慣でやつて居ると理窟も何も要らぬけれども、新しい人はさう行かぬ。だから理窟が欲しければ幾らでも理窟を明かにする。斯ういふ事が必要ナンです。若しさういふ面倒な事がなければ、こゝんのお經の講釋も何も要らない。「南無妙法蓮華經」と言つて居れば有難いのだ」「なんでもかんでも南無妙法蓮華經だ」……これで済むけれども、なかなか若い人はそれでは済まぬ。「何故だ」「何が南無妙法蓮華經だ」といふことになるから、「何だつてかまはぬ南無妙法蓮華經だ」……それではどうしても済まない。それでやはり教も完全であるが、その教を道理を立て、細かに説明する、その理窟を説明して、誰にでも確りと納得させるといふことが必要になつて來る。

佛様の教はそれである。だからお經を讀んで見れば實に事細かに説いてある。どんな人間でも納得の行くやうに説いてある。「宗教は理窟は要らぬ」と

いふやうな議論は、偏つた議論であります。理窟なしに信せられる人もあります。けれども一たび疑ひが起つた時に、その疑ひを解かないで無條件で信じろと言つた所が、それは駄目ナンですから、さういふ場合にはその意義を能く明かにして、納得の行くまで呑み込ませることが必要である。そこで義無礙といふことが必要になつて来る。

それから「辭無礙」これは適當な言葉を使ふといふことでありますが、これが又なか／＼難しい、理窟は理窟でわかつて居つても、言葉で説明する際にその言葉が適當でないといふと、折角の正しい理窟が譯がわからなくなつてしまふ。でありますからその正しい理窟を最も妥當な、それをキツチリと能く言ひ表はすやうな言葉を用ひて説くといふことが必要であります。その言葉を用ひて説く爲には、所謂世間を知るといふ必要が起つて来る。世間を知らないといふとどうしても説けない。頭の中ではわかつて

居るけれども、どうも適切な言葉が見付け出されな
いといふ爲に、自分の頭ではわかつて居るが、何だ
か聴く人に徹底しないとなつて来る。そこで言葉が
大事です。その言葉が無礙である。誰にでもわかり
易いやうな、誰にでも成程と納得の行くやうな言葉
を以て説くといふことが非常に必要であります。こ
れは吾々が子供を教へる場合でも必要であります。
又世間の人に佛教の事などを話す場合でも、やはり
言葉といふものが足りませぬと、尊い教が尊く響か
ない。これは大變大事なことでありませぬ。

言葉の使ひ方が難しいといふことは、例へば、お
月様は大變美しく綺麗に光つて居る。吾々の住んで
居る地球は泥だらけで汚ない、あのお月様とこの地
球とは同じやうな性質のものであるといふことを説
明するのに、どう説明するか。説明の仕方が二つあ
る。「遠くで見るとあんなに美しく光つて居る月だ
けれども、側へ行つて見ると吾々の住む地球と同じ

やうに汚ないのだ」斯う言ふと非常に悪くなる。モ
ウ一つはそれを逆に言ふ。

「この汚ない土も遠くで見るとお月様のやうに見え
るのだ」斯う言ふと大變善くなつてしまふ。同じ話
ですが言ひ方です。すべて言ひ方といふものが難し
い。「あの美しい月もこの土と同じだ」と言へば、
両方汚なくなつてしまふ。「この汚ない土もあの月
と同じやうに美しい」と言へば、両方善くなつてし
まふ。だから物の言ひ方といふものは難しいもので
す。同じ事を言つたつて、言ひ方に依つて大層善い
感じにもなり、大層悪い感じにもなる。この間から
京都の大學の先生が非常に面倒な問題を起して居る
のはそれである。言ひ方が悪い。「女房に不義をさ
れるのが嫌やなら、亭主も亦妾を持つナンといふこ
とはやめろ」と言へば、これは善い理窟です、男女
の間でそんなに不公平があつてはいけない。女房が
不義をするのが悪ければ、亭主も同じやうに憤んだ

ら宜からうと言へば尚に立派です。それを今度はモ
ウ少し言ひ方を變へて、「亭主が妾を持つならば女
房も不義をするのは當然だ」斯う言つたらこれは大
變です。同じやうな理窟だが言ひ方で異ふ。「人を
善くさせる爲には自分も善くしろ」と言へば大變立
派ですが、「向ふが悪いからこつちも悪くする」と
言へば減茶々々になつてしまふ。チョット同じやう
な理窟ですが、言ひ方、説き方に依つてその全體の
気分といふものがスツカリ變つて来る。ですから言
葉が難かしい、吾々日常の生活に於ても、言葉ほど
難かしいものはない、言葉一つで人の気分がまるで
變つてしまふ。それで實際世の中を教はうといふや
うな人は辭といふものに注意して、人の心に軟かに
入るやうに言葉を選ぶといふことが、これは決して
自分が善く思はれたい爲ではない、世の中を救ふた
めに大事なことであります。

徳川時代などの話を、年老つた方からいろ／＼聞

いて見ますと、町の役人がお奉行所へ届ける書類ナ
ンといふものは、非常に言葉を慎んだものだといふ
ことであります。成べくやさしく當るやうに、各人
の出ないやうに言葉を選んだといふ話があります。
或る時横山町の角の所に強盗かなにかあつたと見え
て、拔身が棄てゝあつた。これは大變だ、これをそ
の儘届ければ、どうも物騒な世の中だといふので殿
しい調べが来る。町の者が迷惑する。と言つて届け
ない譯にはいかない、何と書いたら宜からうと言つ
て心配して居つた。すると町内の年寄が出て来て、
そんな事は慣れて居るから俺に委せろといふのでス
ラ／＼と書いた。何と書いたかといふと『横山町の
角に鞘の無い脇差が落ちて居りました』と書いて届
けた。拔身と言ふと角が立つ、鞘の無い脇差と言へ
ば『ア、さうか』で済んでしまふ。さういふやうに
言葉といふものは極く適切な、やはらかい言葉を用
ひなければならぬのであります。それが辭無礙で、

佛様は申し分のない言葉を使はれる。
それから一番大事なのは『樂説無礙』であります。
樂説はいつでも喜んで教を説く、『樂』といふ字は
『ねがふ』と譯しますが、本當に教を説くには、
嬉しい有難い、と思つて説く。これは一番大事なこと
であります。といふのは、教を説いて人にお禮を
言はれ、ばそれは何でもない、教を説いて報酬があ
れば何でもないのですが、世の中が間違つて來ると
教を折角説いた爲に迫害が来る。嗤はれる、罵られ
る、石で打たれ、杖で撲たれる、ひどいのになれば
命を奪られるといふことになる。それでも教を説く
のを有難いと思つて喜んで教を説く。これは非常な
大慈悲心でなければ出來ない。佛様はそれです。ど
んな時でも喜びの心持を以て自由自在に教を説く。
人が感謝しようが、人が憎まうが、迫害が來ようが
何が來ようが、教を説くことその事が有難いのだと
思つて説いて居る。斯うなつて來て初めて本當の佛

弟子であります、これがなか／＼難しいのであり
ます。

それでこの四つの無礙が揃へばそれは佛様であり
又佛様に近いものでありませう。無量無礙といふの
はさういふ事です。

それから『力』これは佛様に十の力が具はつて居
るといふことを申します。少し話が細か過ぎて面倒
ですが、併し考へて見ると吾々に適切な事でありま
すから一通りお話しします。

十 力

- 一、知_二是處非處_一智力
- 二、知_二三世業報_一智力
- 三、知_二諸禪解脫三昧_一智力
- 四、知_二諸根勝劣_一智力
- 五、知_二種々解_一智力
- 六、知_二種々界_一智力
- 七、知_二一切至所_一智力

- 八、知_二天眼無礙_一智力
- 九、知_二宿命無漏_一智力
- 十、知_二永斷習氣_一智力

佛の智慧の力といふものはこの十ある。第一は『是
處非處を知る智力』是といふのは善いこと、非とい
ふのは悪いこと。やる行ひが今この場合に適當であ
るか適當でないかといふことを能く知る力、これが
知是處非處智力であります。

これは人間が世に處する上に於て一番大事です。
同じ事でも、この場所をやつて宜いのに他の場所で
やつて悪いことがある。是處はその場合に適したと
いふこと、非處はその場合に適しないといふことで
あります。人間の行ひといふものは、たゞ切離してそ
の事が善いか悪いかと言つてもわからぬものです。
例へば御飯を食べるのが善いか悪いかと言つてもわ
からぬ。或は欠伸をするのが善いか悪いかそんなこ
とは理窟になりはしない。若し御飯を食べるのが善

であるならば、餘計食ふほど善人でせう。そんなことは無い。「三杯食ふより五杯食ふのが善人だ、十杯食つたら尙善人だ」……そんなことは無い。だから食ふのが善いか悪いかと言つても、それは問題にならない。欠伸をするのが善いか悪いかといふことも問題になりはしない。無論欠伸をするのは善い事ではないでせう。併し欠伸をする者は皆悪人だといふことはないでせう。十遍欠伸をしたから地獄に墮ちるといふ譯でもないでせう。さうすると人間のする一々の動作を捉へて、「これが善いか悪いか」と言つたつて、それは議論にならない。そこで人間の行ひの善い悪いをきめるのは、いつでも時處位といふ三つのことに依つてきめなければならぬ。いつの場合も、如何なる場所でも、誰に對してと、この三つの標準を立てなければ、善いか悪いかといふことはきまらない。時やるか、處でやるか、位といふのは相對する人、誰に對してやるか、これに依つて同じこと

が善くも悪くもなる。御飯を食べるといふことでもいつ食べる、何處で食べる、誰の前で食るといふことに依つてきまる。例へば午後六時頃、自分の家で、相對するのは自分の一家族。斯ういふならそれは善い食べ方でせう。人間は食はずに働けないのでありますから、食ふべき時に、食ふべき場所で、自分の一家族と一緒に食ふとなれば、その食べ方は善き食べ方です。ところが時は午後七時半、處はこの會場で、相對する人は皆さんであるといふときに、皆さんの前に於て私が饅頭を食べたり、ビールを取寄せて一人で飲んだりすればそれは怪しからぬといふことになる。時が善くない、處が善くない、相手が善くない。だからこれは善くないことになる。食べるのが善いか悪いかではなくして、如何なる時如何なる場所、如何なる人に對してといふことに依つて、同じ飯を食べるといふ事が善くもなり悪くもなる。一切の事がさうでせう。それがわからなければ

ば、たゞ架空の話をして見た所で仕方がないのであります。學校などで教へる倫理道德が、實際の世の中の役に立たぬといふのはそれです。時と處と相手とを考慮することをあまり教へないで、たゞ事柄を教へる。それでは實際の役に立ちにくい。いつでも吾々はそれを考へなければならぬ。甲の場所では善かつた事が乙の場所へ持つて行けば悪くなる、乙で悪かつた事が又丙に持つて行けば善くなるということがいつでもある譯であります。それをチャント知り分けるといふことが「是處非處を知る智力」これが一番大事です。時と場合と相手に依つて、いつでも適當な行ひは斯ういふことだといふことを一々知り分けて行く。それが本當の智慧であります。

第二には「三世の業報を知る智力」三世とは過去現在、未來を言ひます。過去と現在と未來とに亘つて人間の爲した業は、必ずその業に相當する報ひが來るといふことを能く徹底的に知る力であります。

業報といふことに就ては前にもチョット申しました。業といふものに報があつて、その報は正報と依報とになる。正報といふのは自分の身と心、依報といふのは自分の境遇、前に爲した自分の業に依つて今の自分は如何なる身を持ち、如何なる心持を有つかといふことが決定される。又今の自分が如何なる境遇に居るかといふことも過去の自分の爲した業に依つてきまる。それが正報と依報とあります。

例へば今小林といふものは皆様の前に立つて居る御覽のやうな身つきをして、斯ういふ心持で、斯うやつて喋つて居るといふことは、私が此處へ來るまでに爲した一切の仕業の報ひとして、今茲に人間となつて立つて居る。さうして依報といふのは今の境遇、音羽のこの會館で大勢の人を前にして居るといふことが依報である。自分がどんな心持を以てどんな身を以て、誰を相手に、どんな所で仕事をして居るかといふことが正報と依報です。それは何に依つ

できまるかといふと、抑々前の世から此處に来るまでの一切の爲した事に依つて今の私が決定されるのです。今晩までの私の爲した一切の事に依つて、明日の朝起きる時の私といふものがさまつて行く。皆さうです。だから業報といふものをズット續きだと思へば宜い。長い樹が伸びるやうなもので、或る所まで伸びて、伸びた先が又伸びる。その伸びた所が元になつて、それから先へ又伸びる。いつでも業が報を生んで、その報が又業になつて、新しい報を作つて行く。斯ういふやうにズン／＼と續いて参ります。それが業報であります。だから自分で爲した事は皆自分で刈取るより仕方がない。他の人がどうもして呉れるものではないといふことを、吾々は考へなければいけない。

この世の中の五十年や六十年の一生涯だけで言ふと、善い事をして善い報ひの來ないのがあつて見たり、悪い事をして悪い報ひの來ないのがあつたりす。ヨウド銀行にいつ迄も金を預けて置くやうなもので今に大きなものになつて来る。斯ういふことを考へなければいけない。支那の漢時代の道士が「惜福」といふことを言つて居りますが、善い言葉だと思ふ。「福を惜む」といふのは、人に福を與へることを惜むのではない、自分が福を取ることを惜むので、成べく取らずに置く、取つてしまへばそれつきりである。銀行に預けてすぐ引出せば元金しか取れない。成べく取らずに置くときれい利が附いてだん／＼大きくなる。それを言ふ。福を惜むといふのは、善い事をして、その福報、善き報ひをすぐ取らないやうに後へ／＼と残して置かう。斯ういふことを道士などは考へて居りますが、確にこれは善い事でありま

るから、三世に亘つて、今善い事をして善い報ひが來ないならば、それは永い後に於て大きな善い報ひが來るだらう。今悪い事をして悪い報ひが無いならば、それは永い後に到つて更に大きな悪い報ひが來るものであるといふことを、確く信じなければいけない。それであつて初めて吾々は心を安んじて、斯うやつて生きて居られるのです。報ひは遅い方が宜い、遅いほどその報ひが大きくなつて来る。遅くなるとそのいろ／＼な周囲の境遇、事情がくつついて來ますから、チヨウド銀行へ金を預けて置くやうなものである。今日銀行へ預けて明日取つてしまへば、利息は一文も附きはしない。十年も取らずに置けば思ひの外利息が附いて来る。二十年も取らずに置けばモット利息が附いて来る。それと同じことで、吾々が茲で善い事をして、報ひをすぐ取つてしまへばそれで終ひですが、善い事をして善い報ひが無い。又善い事をしてまた善い報ひが無いとすれば、それはチ

く來るほど報ひが大きいのだといふやうに解釋して行くのであります。これを十分に知り盡して居るのが佛の智慧の力の一つであります。

それから第三に「諸禪解脱三昧を知る智力」禪といひ、解脱といひ、三昧といふことは、場合に依ると異つた意味に使ふこともありまされども、此處は同じ意味に解釋して宜しい。要するに靜かに考へて見る力です。禪といひ、解脱といひ、三昧といふことは、境遇に亂されないうで靜かに考へて見る力が必要である。普通人間は境遇次第で、周圍が靜かだと靜に考へる。周圍が騒々しいとそれに捲き込まれてしまふといふやうになります。それではいけないのでありまして、周圍の境遇がどうであらうとも、周圍の人がどんなであらうとも、自分はそれに果されないうで、靜に考へて見るといふことが、所謂禪、解脱、三昧といふことであります。これはマア考へ方で出來るのであります。普通は周圍が騒

しなければつい心が惹かれるといふやうなものでありますけれども、それは修養の仕方でありますから、修養を積んで参りますれば、境遇がどんなに變つたつて、やはり自分で靜かに物を考へて行くことの出來ない筈はない。これは努めるより仕方がないことであります。佛様は無論どんな境遇に居ても何ともない。それが諸の禪、解脱、三昧を知る力であります。

以上三つは主として自己を完成する上から申しますが、第四は教を説く場合のことです、「諸根勝劣を知る智力」諸根は教を聴く人の機根、力、程度です。その程度が勝つて居るといふのは、教を聴いても能くわかる者もあるし、それから劣つて居るといふのは、聴いてもなか／＼わからない者もある。だからその聽手の程度がどの位であるかといふことをよく知り分けて教を説かれる。これも非常に必要なことであります。相手がわからないのに、無暗に能

あの人間はこれだけわかつたナ……聴く人がどれだけ理解したかといふことを一々知りわかる力。これが無いと人を本當に教へることは出來ない。こつちがいく加減にやつて居りますと、向ふは都合の好い所だけしか聴いて行かなかつたりするものであります。大勢の人の前で「親に孝行しなければならぬ」といふやうな話をする。さうすると親の方は、孝行をしなければならぬといふ所だけ聴いて行く。息子の方は息子に同情を有たなければならぬといふ所だけ聴いて行く。自分に都合の好い方だけ聴いて行くものです。だからどこ迄理解したかといふことは相手に依つて違ふ。なか／＼これは難しいことです。佛は種々の解を知つて、聴く人の理解程度がそれ／＼違ふことを残らず知り分けて居らつしやる。これも大事なことであります。

それから第六に「種々の界を知る智力」界は人間

しい事を話しても仕様ががない。この人間はどの位の程度だ、この人間にこれだけの話をすれば能くわかる。一方はこれだけの程度だから、此處まで行かなければいけないといふ風に、聴く人の機根、力が違ふから、その力の違ひを知り分けて行く力です。これはなか／＼難しいことであります。大勢の人に話をして、どの位の程度に話をしたらピッタリ當嵌まるかといふことはなか／＼わかつたやうでわからない。子供を捉へて大人のやうな話をしても仕様ががない。又大人を捉へて子供のやうな話をしても、テンデ欠伸をして聴かないといふやうな譯でありますから、なか／＼聴く人の機根を能く知るといふことは佛でない以上は容易に出來ない事であります。

それから第五に「種々解を知る智力」これが又大事です。種々の解といふのは、同じ教を説いても、その説いた事を理解する程度が皆人に依つて違ふ。同じ事を言つても、「あの人間は茲だけわかつたナ、

の境界」これが皆違ひます、人の身の違ふ通り、心持が皆違ふ。又職業が違ひ、身分が違ふ。そのそれぞれ境界といふものを皆知つて、これに適當な教を與へなければならぬ。皆同じやうな教を與へる譯に行かない。人間の境界の違ふといふことは實に恐しいものであります。先年私は十二月の十七日に、淺草の方へ用があつて参りました。恰度今日のやうに午後から雨がシト／＼降つて居る。淺草の菊屋橋の所で電車を乗換へたのであります。乗換へる前にヒョット気が附いて見ると側に二三人話をして居る。「どうも生憎の雨だな、今日は觀音様の市だにこの雨で市が潰れてしまつて本當に困つたナ」と言つて話をして居る。この人々は觀音様の市に商賣にでも出る人と見える。雨で潰れて氣の毒だなと思つて聴いて居つた。それから菊屋橋で電車を乗換へた。今度の電車はあまり人が乗つて居ない。車掌同志が「い、鹽梅に降つて來たナ……」と言つて居る。成

程電車の車掌は降つた方が混雑しないで宜いでせう。観音様の晩などは人込みで随分車掌は困るでせう。所が雨が降つて来たから、あまり混雑しないで樂が出来る。これを聞いて私は思った。これだナ。先の電車では降つて困ると言つて居る、今度の電車では、鹽梅に降つて来たナと言ふ。それが二分か三分の違ひで、人が違ふと斯ういふやうに違ふ。人間は皆これナンだらう。その境界に依つて總ての物の解釋が違ふ。善い雨ともなり、悪い雨ともなる。雨の方では黙つて降つて居るけれども、人間の感じて皆違ふ。世の中には斯ういふやうな事が絶えずありませう。ですから種々の境界を知らなければ教といふものは説けない。同じ尊い理窟を言つても、甲の人は感心する、乙の人は反感を有つ、丙の人は喜ぶ、丁の人は腹を立てるといふことになるでせう。だから種々の境界を知るといふことが必要です。これも佛の法を説かれる上には大事なことであります。

を本當に知つて居らつしやる。

第八に「天眼無礙を知る智力」天眼といふのは普通の人間の見られない所まで見透すことであります。これは別に深いことはない、智慧が進みさへすれば普通の人間の眼の届かないやうな所までも能く見透すことが出来る。これは廣く云ふのでありますから別に説明を要しない。

第九に「宿命無漏を知る智力」宿命は前の世からのいろ／＼な定めを知つて、さうして無漏といふ迷ひの無くなるやうにする。「無漏」といふことが非常に大事です。人間がどれほど智慧がありましても、智慧に依つて迷ひを増長させるのではいかぬのでありますから、前の世からの事を確かり知り盡して、さうして自己の心の迷ひを取り除く力がなければならぬ。自分の心に迷ひが一パイ満ちて居つて人を教へ導くことの出来よう譯はない。漏といふのは「もれる」といふ字であります。迷ひのことで、迷ひ

それから第七に「一切の至所を知る智力」これが面白い、至る所といふのは行さ着く先です。今あゝいふ事をして居ると結局此處へ行くといふ、それがわからなくてはいけない。吾々にはなかく／＼わからぬ。「あゝいふ事をやつて居るが、あれを續けて行く」と結局どうなる」といふ行先を知る力、これが一人一人の行ひに就いて判断が出来なければ、人を教へ導くといふことは出来ない。これが非常に大事であります。「あれは今道樂をして金を使つて居るが、結局斯うなる」「あれは今得意で賣出して居るが結局どうなる」「あれは今悲觀して腰を抜かして居るが、結局どうなるだらう」斯ういふやうに、今の所ばかりではない、この分で行けば結局何處へ落着くだらうといふ所を見透して、さうして一切の人を教へ導かなければならぬ。これは一切の行き着く先を知る力であります。人を教へるといふやうな人は、それでなければ出来ないであらませう。佛はさういふ事

は自然に身から漏れ出る。汗が身から泌み出すやうに心の土臺が確かりして居りませぬといろ／＼な迷ひが漏れ出て来る。その漏れ出て来る一切の迷ひを取除く力、それが大きな力であります。

最後に第十として「永く習氣を断つを知る智力」これは非常に大事なことです。習氣といふのは、迷ひが無くなつても、迷ひの起りさうな傾向が残つて居る。これを習氣と言ふ。その習氣を取つてしまはなければいけない。行ひの上では別に缺點は無いけれども、心の中にはまだ悪かつた形跡が残つて居るといふ、その習氣を永く断つと言つてスツカリ無くなしてしまふ。それでなければ本當の覺りとは言へない。腹を立てないけれども腹の立ちさうな氣分だけは残つて居る。少しも慾張つたりはしない。けれども欲しいナといふ料簡だけは何處か残つて居る。斯ういふのがある。吾々凡夫はさうです。その習氣が無くなつてしまはなければいけない。私などはこ

の頃佛教の話などをして居りますから、大きな聲を出して人に怒鳴りつけることはしない。電車の中で人に足を踏まれても「この野郎ッ」などと言ひはしない。言ひはしないが、言つて見たいやうな気分が残つて居る。マア我慢して言はない。「どうも佛の道を説いて居りながら電車の内で怒鳴るなどといふのは差しい事だ」と思ふから、マア踏まれても黙つて居るけれども、ヒョツとしたら怒鳴りたいやうな気分はどこか残つて居る。それが所謂習氣です。その習氣を斷つといふことが必要です。行ひに缺點の無いといふだけのことも難しいけれども、モット言へばその缺點を生じ易い気分までスツカリ無くなすといふこと、これが本當の覺りでありませう。ですから一番終りに書いてあります。吾々はマア行ひは慎めるが、心までは慎めない、心の表面は慎めるが、奥までは慎めないものであります。外國に永く行つて居る人の話を聞いて面白いと思

つたのは、私は英吉利に少しばかり居つたし、獨逸にも少しばかり居つたが、僅かの間で、起きて居る間は、英吉利では英語を使ひ、獨逸では獨逸語を使つた。けれども寝て居る間に夢を見る。夢の中では日本語で話をして居る。所が英吉利に二十年も居つた人の話を聴きましたら、夢の中でも英語を使つて居るさうです。これは本ものです。吾々はさうは行かない。眼の醒めて居る時には、日本語が通用しないから英語を使ふが、夢ではかまはないから、何處へ行つても日本語で喋つて居る。それだけ違ふ譯です。本ものになると、夢の中でも、眼が醒めて居る時でも同じになる。これはマア外國語の話ですが、總てがさうです。私共は差しい譯だけれども、眼が醒めて居る時と夢の中と違ふのであります、それは習氣が残つて居る。まさか音羽の通りで裏口を拾つても、私は猫婆にして懐ろに入れて歸りはしませぬ交番へチャンと届けます。併し金を拾つた夢などは

見るやうです。どうも自分といふものが本ものになつて居ない。だから表面だけは悪い事をしないのだけれども、腹の中ではどうも時に悪い方になり勝な気分が残つて居る。それをスツカリ無くしてしまふといふことが、永く習氣を斷つといふことであります。

この十の力といふものは佛様のことであつて、これを揃へて持つといふことは難しい、けれども修養の標準としては尚に結構であります。斯ういふことを考へて自分を振返つて見れば、自分の間違ひがハツキリわかる譯であります。この十力を佛の所謂「力」と申します。

次に「無所畏」といふのは、教を説く時に佛様は誰にも憚らないで教を説かれる。即ち御自分の信じ居る通りをお説きになる。それを無所畏と言ふ。これには四つの無所畏を挙げます。

一切智無所畏

漏盡無所畏
說障道無所畏
說盡苦道無所畏
これを四無所畏と申します。「一切智無所畏」といふのは、一切智は佛様の智慧です。一切の事を知り盡して居らつしやるから、佛様は佛様御自身の考を有體に打明けてお説きになりました、何人も憚らない。自分の知つて居る通りをお説きになる。これが一切智無所畏です。

それから「漏盡無所畏」は迷ひを無くする。佛様は迷ひは少しも無い、その迷ひの無いお心持を以て一切の人間に對するから誰も畏れない。これは別に説明を要しないと思ひます。佛様と成れば迷はないにしまつて居る。迷ひが無いから誰も怖い者もなければ憚る者も無い譯でせう。

所が残りの二つが考へなければならぬ事である。「說障道無所畏」道の障りになることを説いて少し

も遠慮しない。これはチョツト出来ない事です。道の障りになるといふのは、凡夫が心が驕つたり、或は悲しい事に遭つて力を落し過ぎたり、或は金があるからといつて金を振廻したいと思つたり、勢力があるからといつて勢力を振廻したいと思つたり、少しばかり學問があるからといつて、その學問に適上るといふやうになれば、さういふことは皆道に入る障りになるでせう。その道に入る障りになるものでも少しも遠慮しないで人に説いて聴かせるといふことは、なか／＼難しいことです。大概の人はさう行かない。斯ういふ事を言つてはあの人の氣に入らぬだらう」と思つていゝ加減にして置く、それでは本當は人は救へない。だから道の障りになることがあれば少しも遠慮無しに、向ふの人の料簡などはかまはない。自由自在に有體に教を説いて、さうして道の障りを除いてやるといふことが、即ち説障道無所畏であります。

いこと「解脱」といふのは一切の苦を離れることであります。苦の本は迷ひでありますから、そこで迷ひが無くなつて初めて一切の苦が離れられるのであります。その迷ひを除いて苦を離れるその一切のはたらきが解脱であります。

それから「三昧」といふのは心が静かになつて、善い事に心が定まつて動かないこと、善心、即ち善き心持が一所に定まつて動かないこと、斯ういふやうな力を佛様は持つて居らつしやる。

それだから「深く無際に入る」と言つて、際も無い所まで、所謂絶對の眞理を深く究め盡して居られて、さうして「一切未曾有の法を成就せり、昔から曾てない所の、何人も知り得なかつた事を知り、何人も究め得なかつたところの道を究め、さうして大勢の人に教をお與へになる。斯ういふ譯だからどんな人間にも教を與へることが出来るのであります。

舍利弗、如來は能く種々に分別し、巧みに諸法

それから「説盡苦道無所畏」本當に人間の苦しみを除くのはどうしたら宜いかといふことを、少しも憚りなくお説きになる。苦を盡す道を説く。これもなか／＼難しい。斯うやればチョツと病氣に障るぐらゐの事を言ふのでも、なか／＼難しい。有體に言へない、だからいゝ加減にして置く。酒の非常に好きな人があつて、重い病氣をして酒を一滴も飲んではいけないといふ。併しそれでも「偶には宜からう」と言ふと、醫者もそれほど強くは言はない。「マアア成べく御用心なさい」ぐらゐで歸つてしまふ。本當に苦しみを除いて、本當に身の悩み、心の悩みを除く道を、無遠慮に、少しも憚りなしに説くといふことは、佛のやうな廣大な慈悲を具へた人でなければ出来るものではない。それを説盡苦道無所畏と言ひます。さういふやうな力を佛は具へて居らつしやる。

を説き、言辭柔軟にして衆の心を悦可せしむ。
(舍利弗、如來能種種分別、巧説諸法、言辭柔軟、悦可衆心)

舍利弗よ、如來は種々に分別して巧みにいろ／＼な法をお説きになる。巧みにといふのは、聴く人の心に能く入つて行くやうに教をお説きになる。その言葉は柔軟である。柔軟といふのは人に反抗心を起さしたり、人に不愉快な心持を起さしたりすることがない。さうして衆の心を悦可せしむ。皆の心持に「成程有難い」といふ悦びの心持を起させる。これは佛様の境界を言ふのであります。

舍利弗、要を取りて之を言はば無量無邊未曾有の法を佛悉く成就したまへり。
(舍利弗、取要言之、無量無邊、未曾有法、佛悉成就)

舍利弗よ、今いろ／＼な事を言つたけれども、その要を取つて、一言にして言ふならば、「無量無邊未曾有の法、何と言つて宜いか、説明の出来ない、形容

の出来ない、昔から未だ曾つてないところの法を、佛は悉く成就して居らつしやる。佛は絶対の覺りを開いて居らつしやる。であるからその教といふものは完全無缺な教といふものになつて世の中に現れて來るのである。併し斯ういふ事を言つた所がなかなか普通の者にはわかるまい。

止みなん舍利弗、復説くべからず。所以は何ん、佛の成就したまふ所は、第一希有難解の法なり。唯だ佛と佛とのみ乃し能く諸法の實相を究盡したまへり。

(止。舍利弗。不須復説。所以者何。佛所成就。第一希有難解之法。唯佛與佛。乃能究盡諸法實相。發ら説明したつてその境界になつて見なければわからない。だからモウ説くことを止めよう。何故ならば、佛様のお覺りになつたその事といふものは、世界に類の無い一番勝れたものであつて、普通の人間の知らうと言つても知られないやうな、そんな尊い

が無い。そこで文字や言葉を藉りて、そこを通つて、さうして言へない所、書けない所、語れない所を、それは皆自分で捉へるのである。これより仕様ががない。

面白い話があるのは、禪宗の方の人は「不立文字」と言ふ。心から心に傳はるのだ。字などをやつて居つては仕様ががない。不立文字だと言ふ。所が或る人がそれに對して「不立文字といふのはやはり字ではないか。やはり字が無ければ不立文字も言へはしない。不立文字と字で書く以上、不立文字でなくなつてしまふではないか」と言つたといふ話があるが、成程その通りで、不立文字と言へばやはり字です。だから字が要らぬといふのではない。字に執はれてはいけない。言葉や文字に執はれてはいけないので、言葉や文字を手懸りとして、言葉にも言へない、文字にも書けないものを捉へなければいけないといふことでもあります。これは宗教だけでなくして何でも

道ナンだから、それはモウたゞの人間ではわからない。これは佛と佛とのみ能く究め盡して居らつしやるのである。佛の境界にならなければ本當にわからないのだから、言葉で以て説明することの出來よう譯はない。

そこでこの事はお互に經典を讀むに當つては、注意しなければならぬ事でもあります。いくらどんな言葉でも、いくらどんな文章でも、言葉には限りがあり、文章には限りがあるのだから、文字や言葉で以て絶対の道だの理だのといふものを説き盡すことの出來る筈がない。併ながら文字や言葉を藉りなくては何もわからない。だから文字や言葉を藉りて、此處から入つて、さうして文字にも書けない、言葉にも言へない所を捉へる。文字や言葉といふものは入り口である。そこを考へなければいけない。と言つて「字にも書けない、言葉でも言へないから、何も言はない」といふのでは、チンで教といふものに縁

さうです。一つの藝術でも一藝に秀でた人は必ずそこを捉へて居る。言葉でもなんでも言へないものがある。それがなければつまらない。字を書いても、繪を描いても、どうやるかといふ説明は出來ない。一通り字を書かうと思へば、筆を斯う持つて、手を斯うやつてといふことは教へるけれども、餘は自分でやるので、それはモウ誰か教へようと言つたつて教へられない所がある。

私はこの間いろいろな機械を扱ふ人の話を聞いて非常に面白いと思つた。あの顕微鏡や望遠鏡のレンズであります、あれは御承知のやうに獨逸製が非常に良い、白耳義邊りでも良いものが出て來るが、あれはどんなにしても機械だけでは一番良いものは出來ないさうです。一番良いものを仕上げるには、やはり人間が手心で、手加減で磨くのだといふことです。その手加減は何と言つて宜いかわからない。自分か長い間慣れて居つて、「此處だナ」といふ所でや

るので、これはモウ親が子に傳へることも出来ず、先生が弟子に傳へることも出来ない。その微妙な所があるので、一番良いものが彼處に出て居るのだといふ話を聞いたのでありますが、總てがさうでせう。いろ／＼そんな話を澤山聞いて私は面白いと思つたのですが、昔の錦繪の話も聞きました。廣重の錦繪などに能くある空の碧い所を、上の方が目立つて碧くて、それから下の方へズツとばかしてあります。あれを昔どういふやうにして版で刷つたか、この頃はいろ／＼技術も進んで機械的になつたやうですが昔あれをやるのには、版木に一面に藍の繪具を塗つてしまつて、それから布巾を熱い湯で絞つて、その布巾で以て繪具をスツと拭く。さうすると下の方がズツと淡くなる。そこを刷るのださうです。その布巾の絞方といふものは言へない。茲まで絞るとか。どこ迄絞るといふことは口では言へない。何分間にどれだけの壓力を加へてといふやうな譯に行かない

手加減です。その手加減はモウ説明が出来ない。「此處だ」といふ所がある。これも親が子に傳へることが出来ない、先生が弟子に傳へることが出来ない所がある。すべて一藝の妙といふものはそれです。つまり口で言へない、親子の間でも、先生と弟子の間でも傳へられないものがある。それがあつて初めて尊いのだ。藝は皆さうであります。

教の事でもそれです、つまり言へないもの、傳へられないものがある。それはモウ自分で會得するより外ない。自分で深く味はうて、「成程此處だナ」……それは自分だけしかわからない。それを言つて居るのです。佛と佛とだけが知つて居るぞといふのは、お前達にはわからないぞと言つて、吾々を突き放すことではない。佛様はそんな邪慳な方ではない。佛だけが知つて居る、貴様達にはわからぬぞといふのではない。佛に成つて初めて本當にわかるので、ここになるにはお前達自分で苦心をしろ。それは口で

言へるのではない、言葉で言へるのではないから、そこは自分で苦心して、自分でだん／＼味うて、一歩々々佛の境界に近づくより外ないのだ。斯ういふことを言つて居られるのであります、これを下手に讀むと、お釋迦様といふものは洵に邪慳な人で、この事は佛の俺達だけ知つて居る。貴様達にはわからぬぞと言はれたと思ふと心細いけれども、決してさういふ譯ではない。であるから天台大師がその意味を言つて、法華經の文句を讀んだ、けではない。その文章の底に秘して沈めてあるものがある。

「文底秘沈」

と言ひまして、文章で言へないものがそこにあるのだ。そこを捉へるのだといふことを言つて居りますが、これは此處まで行くより仕様がなない。餘程うまい説明をして見た所が、多寡が説明です。況や吾々共のやうな者がいくら何萬言を重ねた所がなんでも

ない。お互に言葉とか文字とかいふものを縁として、餘は深入りして自分でやることであります。

そこでさう言つて置いてお釋迦様は又言はれる。そこが面白い。お前達にはわからないぞ、佛と佛とのみだぞと言はれるから、モウ言はないのかと思ふと又言つて居る。だから決して吾々に知らせたくないのではない。知らせたくないといふ邪慳な人ならモウ言ひはしない。「貴様達にはわからぬぞ」、それで止めてしまふ筈です。所が止めない、止めない所を見ると、これはわからせる積りに相違ない。わからせる爲には、吾々自分がわかるやうに努めるより外ないが、併しモウ一つ言つて見れば、「諸法の實相」と言つて、總ての物の眞實の有様を佛が究め盡して居らつしやるのだと言はれる。

所謂諸法の如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等なりと。

(所謂諸法、如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等)

その眞實の有様とは何だといふと、これを「十如是」と申します。十のものに皆「如是」といふ字が附いて居る。如是といふのは、文字の通り言へば「是の如し」といふだけのことでありませうが、是の如しといふことはたゞこの通りといふ意味ではない。永久にいつ迄経つても變らない、必ず永久に具はつて居るところの條件です。「如」といふのはいつでもといふ、變らない意味、動かない意味です。凡そ世の中に物が存在する以上は、佛でも惡魔でも、鬼でも、形のあるものであれば、机でも、腰掛でも、茶碗でも、土瓶でも、何でも凡そ世の中の有りど有ゆるものは、この十の條件を具へて居ないものは無い。言ひ換へればこの十の條件を具へなければ物は存在するものではない。それはいつの場合でもさうだ。だ

から如是と言ふのでありませう。

相、性、體、力、作、因、緣、報、果

本末究竟等

その十の條件といふのは先づ「相」「性」「體」相は外に現れたる「すがた」様子です。性といふのはそのもの、性質、體といふのはその性質を具へたその物といふことであります。例へばこのチヨークは白いと言ふ。これが相です。あなた方の前に現れたチヨークの相は白い。その白いといふ相をどうしてこ

れが持つて居るかといふことが、そのもの、性質です。電氣燈が明るいといふ、これが相です。その明るいといふのは電氣が燃えて居るといふ、これが性質です。外に現れた相はその性質の現れナンである。性質が無くて相が現れるものではない。相といふものは眼に見えないでも宜い、聲でも宜い、鐘のゴーンといふ音もさうです。優しさうな顔、それは慈悲の心持から出る。額に八の字を寄せて、口をキユツと結んで險惡な顔をして居る、それは相です。それはその人が腹を立て、クシャ／＼して居るといふ性質がそこに現れた。斯ういふやうに外に現れた所が相で、その相が現れたのはその物の有つて居る性質です。その性質は、だれが有つて居るか、その物が有つて居る、その性質を具へて居る物が實在する。そこで體と言ふ。ですから相と、性質と、その性質を具へて居る本體そのもの、これを相性體と言ふ。物があれば物には必ず性質がある。性質があれば必

ず相が外に現れる。外から言へば、現れた相を探して見ればその性質が現れて来て、その性質は何物かが具へて居る。相と性と體といふこの三つは離るべからざるものである。どうしてもこれは三つ擧げなければならぬ。例へば氷といふものがある。それが冷たいといふ性質を有つて居る。さうすると人が手に觸る時にヒヤツと感ずる。或は又櫻炭のおこつたのがある。それが熱いといふ性質を有つて居る。だから人が手で觸つた時に火傷をして飛上るやうな強い刺戟を感ずる。斯ういふやうに皆外に現れたものがその性質の現れで、その性質はその物に具はつて居る。斯ういふ譯ですから相と性と體の無い物は無い。

そこで外に現れたものを取除いて本體があるのではない。本體があれば必ず外に現れるのであります。これは佛様でもさうです、佛鬼でもさうです、畜生でもさうです、机でも、本箱でもさうです。外に現

れたところの相と、本来の性質と、その性質を具へて居るその物の實體といふ三つのものがあるのです。その相性を具へたものが茲に存在すると、それが何かの「力」を有つて居る。力といふのは、普通には何か他の物を押へつけるのを力と思ふけれども、さうではない、例へば電氣燈は明るくする力を有つて居る。チョークはそこに觸れれば白い線を残すといふ力を有つて居る。斯ういふ譯で、力を有つて居ないものはありはしない。この壇は私の身を支へるといふ力を有つて居る。この天井はこの部屋を上から覆うて雨を防ぐといふ力を有つて居る。斯ういふ譯でありますから、世の中に物が有る以上は、力の無い物はない。たゞ力の多いか少いかはありませうけれども、力の無いといふものはありませぬ。さうして茲に物が有れば力が有る。力が有ればその力が外にはたらいいて「作」といふはたらきになる。力は内に存する、その力が外に現れてはたらきとなる。

力といふものは現れなくても力は有る。その現れたものが「作」で、作用といふはたらきです。どんな物でも力が有れば、力が外に現れる。それを「力作」と言ふ。それから今度は一つの物だけではない、世の中の物が相對して居りますから、そこに物の變化が起ります。その變化の起るのには「因」といふ原因と、「縁」といふその周圍の境遇事情と、それから「果」といふその現れた結果と、「報」といふその結果の後に残すはたらきが必ずある。例へば今のチョークの場合で言へば、私がチョークを持つたといふことが因です。それからボールが茲に在る、ボールの上といふことが縁です。さうして茲に棒を引くといふことが果です。その棒を引いたのがあなた方に見えるといふことが報です。それが因縁果報です。或は又マツチがある、マツチを摺るといふことが因です。このマツチを斯ういふ空氣の中で摺るといふ

ことが縁です。さうすると火が出るといふことが果です。その果が物を焼くといふことが報です。斯ういふ譯でいつでも因縁果報とある。だから因と縁が揃はなければ果報は出て来ない。若しその縁が變れば、同じ因でも異つた結果を生ずる。例へば私がチョークを持つて棒を引くといふことが因ですけれども、それはこのボールの上といふ縁があるから縁が引ける。空氣中でやつたんでは、私が幾らチョークを動かしても縁は出て来ない。縁が異ふ、因と縁と揃はなければ果といふものは出て来ない。因だけではないけない。マツチを摺ると火が出るけれども、併し水甕の中でポチャ／＼やつても火は出ない。それは縁が悪い。だからいつでも因と縁が揃はなければいけない。因と縁とあると、そこに結果といふものがあつて、その結果といふものから必ず報といふその後に残るはたらきが出て参ります。これが因縁果報であります。

佛様で申しますれば、佛様の非常に尊いといふことがそれが佛の相で、佛様が大きな智慧や慈悲の性質を有つて居らつしやつて、さういふ性質を有つて居る佛様、その方が一人の佛として世の中に存在して居らつしやつた。さうしてその佛様は一切衆生を救ふ力を有つて居らつしやる。その力が説法といふはたらきになつて現れた。その佛の説法するといふ一つの事柄が原因となつて、聴きに來る者があるといふことが縁となつて、その説法が後世まで遺るといふ果を生んで、その果に依つて一切衆生が救はれるといふ報が出来て來る。斯ういふことになるのであります。世の中のすべての物を考へて見ると、みなそれで説明が附きます。何でも考へて御覽になれば、大きい事、小さい事、みなさうです。それでありますから、凡そ世の中のありとあらゆるもので、この性質を具へない物はないといふのです。そこで「本末」といつて、本から末まで――は

じめの「相」といふところから、終ひの「報」といふところまでの、此の條件は、「究竟して等し」といつて、何處へ行つても、如何なる物にも同等に具つて居るものである、この「相」から「報」までの九つの條件は、どんな場合でも、尊い物でも、卑いものでも、形の有る物でも、形の無い物でも、どこにも行き渡つてみな具つて居るといふのであります。「等」といふ字は、「究竟してひとし」といふことであります。ですから私共が日常近く見たり聞いたりする物に就て考へて見るとわかる。例へば此の机なら机が、どんな相だ？どんな性質だ？何處にどう在るのだ？どんなはたらきを持つて居る？さうしてこの物が周囲とどんな縁を作つて、どんな結果を生ずるかといふことを考へて見ると、皆この十の條件のどれかに當嵌まる。この十の條件を具へずして存在する物は一つも無いのであります。

だから吾々が物を調べる時に、この條件を一つ一題でありませう。これは西洋人よりは東洋の人、殊に佛教の方の着眼が精密である。西洋では御承知のやうに因果關係と言ひます。西洋の哲學者、科學者は皆因果關係といふことを重んずる。原因があれば必ず結果がある。斯ういふのであります。原因があれば結果があるといふことは明かであるけれども、同じ原因であつて同じ結果を生じない場合がある。それは縁が異ふからである。だから縁といふことは餘程能く考へなければならぬ。こゝは佛教の方が非常に精密になつて居ります。今申すやうに、マッチを摺るといふことが、火を生ずるといふ果の無いことがある。縁が悪くて水の中で摺れば火は出ない。だから因果縁果といふ、この縁といふことに着眼した所は、佛教が非常に勝れて居る。だから吾々は縁を求めるといふことを努めなければならぬ。

この法華經の方便品に至つて、これから後の方に「佛種從縁起」佛に成る種は縁に依つて出来るの

つ調べる。これが缺けてはいけない、又缺けよう筈もない。この條件を一つ一つに調べて、どれも見違ひの無いやうに、どれもいゝ加減なことではなく、徹底的に能くこの條件を揃へて物を見るときいふことが、それが諸法の實相、總ての物の眞實の相を知るといふことである。斯うなるのであります。

佛様は一切のものを本當にさういふ風にして觀て居らつしやる。それだから佛の照し見た所が眞實の道であつて、その眞實の道が衆生に傳はるのだといふのであります。それは佛様ばかりではない。これから後の方の經文に依ると、一切の人間はみな佛に成る性質を有つて居るといふのですから、吾々だつて骨折つて行けばそれが捉へ得られるといふことになつて行くのであります。

十如是のことは、以上申述べたところで一通りお解りになつたこと、思ひますが、この中に於て特に注意して申して置きたいのは、因と縁と果といふ間だといふことを言つて居られるのはそれです。縁が悪くては佛に成れない。人間は皆佛に成る本性を有つて居るのだけれども、縁が悪かつたら佛に成れない。丁度今言ふやうに、マッチはいつでも火を出す性質を有つて居るけれども、水の中に入れてピョク／＼にして置けば火が出ないと同じことです。そこで縁といふことが非常に大事である。因と縁とが揃はなければいけない。折角佛に成るべき種を有つて居りながら、その縁を得ずして、一生涯佛の教に親まずして終る者が多いといふのは悲しい事です。それは縁が無いからである。縁がありさへすればその因といふものがキツト活きて来る。縁が無くて終る人が多いのであります。現に斯う申して居る私などは、洵に力も徳も無い者であります。縁があつて、さうかして佛様の教を學ぶことが出来た。この縁といふものは非常に有難いと思はなければならぬ。それと共に自分が斯の如き尊い縁に會つたのであり

ますから、一人でも多くの人にこの縁を與へたいもの
のだといふ心持が起きて來る譯であります。あなた
方でもさうお考へになれば、縁を與へてやるといふ
ことほど大きな功德はない。縁は餘所から與へるも
の、因は自分が有つて居るものでありますから、一
人でも多くの人に善き縁を與へる、所謂縁縁と申し
ますが、これは非常に大きな功德であります。中に
は折角善い人間に、悪い縁を與へる者もある。さう
いふ人も随分世の中には多い。折角堅い人間に悪い
縁を與へてカフエーへ誘つた、それが病つきになつ
て、親父の金を端から掴み出すといふやうなことに
なる。飛んでもない縁を與へたものです。そこで勝
縁を與へるといふことが大事なことです。私共は幸
にして善き縁に會つたのだから、多くの人に善き縁
を與へるやうに努めなければならぬであらうと思ひ
ます。

そこでこの十の條件が揃へば宜しい。無論これは
解されるやうな人もある。それは性は善いけれども
相が缺けて居る。又言葉は親切さうだけれども、行
つて見ると一向骨折つて呉れないといふやうな人が
ある。これは相の方ばかりで仕様がなない。いろ／＼
ありませう。無論有ゆる物はこの性質を具へては居
るのだが、その具へ方が平均して居ないで、一方に偏
つた具へ方をして居るのが普通の人間であります。
そこで人間の修養の上に於ては大に反省して、どう
ぞこの十の條件を、總てに於て遺憾なく、調和的に
揃へるやうに努めるといふことが非常に必要な事
であります。

(第十八講了)

揃ふべきですが、モウ一つ茲に考へなければならぬ
ことがある。物が完全であればこの十の條件は同じ
やうに揃ふ、併し世の中の物は不完全であるから、
十の條件を具へない物はないが、その有ち方が違ふ。
今云ふやうに因と縁と無い物はないが、因の方が善
くて、縁の方が悪いものがある。それと同じやうに
力が有れば現れるけれども、力の有るほどに現れな
いものもあるし、それから現れる方が多くて實力が
これに伴はないものもあるといふことになる。相と
性質と本體とは同じだけれども、折角善い性質を有
つて居りながら、善き相になつて現れない人があつ
たりする。無論十の條件は具はつて居るのだけれど
も、その十の條件が相應して調和して存在するとい
ふことが難しい。どこか片手落ちになり易い。そこを
自分の修養の上に於て注意しなければならぬ。例
へば親切な心持はあるけれども、親切な言葉になつ
て現れないで、兎角人に話すのでもブツキラ棒で誤



記事

本部 團報

團員總會 四月廿八日午後五時より本部會館樓上に於て、規定に依る本團員總會を開催した。當日上回理事長は生憎急用で豆州に旅立たれた爲めに、井上理事議長席に着き、磯部常任理事より昭和九年度の事業並に會計報告をなし、其承認を得てより次で本年度の豫算を議し原案の通り可決した。出席者總計百二十九名。粗飯を共にし各位の胸襟を開いた和氣春の如き中に、夜分の開宗會を替む爲め六時半閉會の止むなきに至つた。

左に昭和九年度の會計狀態を報告し、事業報告は其都度本誌に掲載せるを以て重複を恐れ省略致すこととする。

收支勘定明細表(自昭和九年四月始至昭和十年三月終)

(一) 收入之部

一金七貳七八四〇 總 收入

内 譯

Table with 2 columns: Amount and Description. Includes items like 寄附金及維持費, 圖書費, 講座費, etc.

(二) 支出之部

Table with 2 columns: Amount and Description. Includes items like 印刷製本費, 講師謝禮, 郵費, etc.

右之通報告候也

昭和十年四月廿八日

(三) 收支差引勘定

一金七七〇、參四 次年度へ繰越

追前今年度よりは寄附金の激減を見るべく従つて團員各位の維持並團費及び一般誌料は滞りなきやう御高配願度、邦家多事の際本多上人の學風を追慕し、日蓮教學の精髓を宣揚しつゝある貴力の至等淨業に賛賞著設せられんことを歸へに念願する。

立教團員會 「日蓮は何の宗の元祖にもあらず又末葉にもあらず」と仰せられて居るが、私共から之を拜すれば矢張り宗祖として崇敬し、立教を讃仰するは當然の事柄と思ふ、爰に日蓮教學の深味を窺ふものではあるまいか

四月廿八日は恰度日曜日に相當し、曇天ではあつたが集會には適當の氣温であつた。午後六時四十五分階上御寶前に於て、文學士小西日喜師大導師の下に一同至心に法要を尊ませて戴いた、一人より三人五人十人百人と和唱する時に、自ら妙境に在ることも其他一切を忘れて唯梵音のみ耳に入る。……ゴーンと響く鐘の音にハット我にかへりやがて式典も終りを告げたのである。

午後七時十五分謝恩特別大講演會を東京府教化團體聯合會後援の下に開催し、劈頭磯部滿事氏は日蓮聖人の教化の目的がいづれにあるかを明し、續いて小林一郎先生は「如法思國」と題して日蓮聖人の高調力説されて居た要項に對して其の妙辯を振られ、大衆は酔へるが如く視線は悉く壇上の一筋に集注し、時餘にして拍手雷の如くに起つた。やがて文學博士中村孝也先生は温顔微笑先づ講堂正面に

奉揚された日蓮大聖人の御尊影に御挨拶されて居た、この敬虔なる態度に講堂の人々は一種の強い感激を興へられた。

中村博士は毎月末には沼津に在ます親御に御挨拶の爲めに必ず赴いて奉仕する、これを無上の御樂とされてゐるさうで、此の日もその貴い時間を割愛して頂いてお歸り早々御出講をお願いしたやうな次第である。モーこの一事でさへ十分である上に、登壇された御態度を視た私共は「楠公の佛教信仰」の一時間あまりのお話がいかに聽衆に徹底せるかは記す迄もないことであらう。

而して最後に小西日喜師が閉會の挨拶と感謝報恩の唱題に一同和唱、以て惜しい大會の幕は閉された。

正に九時四十五分。當日來會者へは本多上人著「法圓冥合」一部宛贈呈した。

伊東御法難會 弘長元年五月十二日は申す迄もなく、日蓮聖人伊東御法難の聖日に相當するので、他の差合を慮り一日繰上げて十一日土曜日の晚七時より營んだ。

の木村新管長をお招きして一つは宗祖への報謝とし、一つは自他の圓融を計つたのであるが、惜しむべし周圍を憚つてお出にならなかつた。一林自分が正しくして布教せんとするに誰れに遠慮氣兼ねが在るものか、自ら進んで不請の友たるべきに、況んや辭を卑うして迎ふるに於て何の畏懼する處があらうぞ、それでは言行表裏も甚だしい、今の時そんな自己の安寧を考へるやうで、どうして大衆を化導出来よう、俗世間の眞似行政でどうして社會の鹽となるかが出来よう、佛祖は之を何と御覽遊ばすか、教のみあつて行も證もない、否白法は隱没の時だ、人を畏れては法は説けまい、日蓮の弟子は隨病にては協ふべからずであるまいか。無論こゝには愚痴を述べないのでない、彼の爲めに彼の惡を除くは彼の親也、慈悲の寸心から事實を擧げて聖斷を仰ぐものである。所詮吾等は吾等の行くべき道を眞直に行かう。

本多上人の平素心にせられた道を辿らう。法統擁護は本團の中心生命である、疑ふ者は「生師の靈呪」を見よ。

又宮原氏が四月の「立正安國」に時言子と

法と世法」磯部先生。

廿七日 夜 神奈川區三ツ澤町齋藤氏方にて。小西師の親心本意抄の御話。

福島支部報

五月四日(土)磯部先生の御來福を仰ぎ、福島高商日蓮聖人讃仰會新入生歓迎會を午後一時より、高商生徒集會所に催す。定刻若井支部長を始め支部の方々、商業學校岩淵教官、師範學校栗原先生、殊には伊藤高商校長及會長吉松教授、並に中山先輩の御出席の上、新會員二十餘名参加し、磯部先生より「日蓮聖人の御人格」につき御講話、終つて座談會、自己紹介あり卒直なる意見交換あり、和氣堂に滿つ。夕陽吾妻山に没せんとして餘波惜しくも散會す。各々會の益々隆盛ならんことを期したり。

同日 午後六時半より、大町の中村様方にて支部例會、二十數名の來會あり。磯部先生は「法華經七對治中」の二つの譬につき御講話あり、當夜は又眞の信仰と誤れる信仰との判別につき若井支部長の熱語あり、法華折代の實を擧げ十時過ぎに討議旺なりき。

御講義中にて同法位に考されつゝ、猶御希望の方には招待券が發行されてゐるから御申込になるとよい。チョットあの人にもお聞かせしたいと思はるゝ時などには大層便利と思ふてゐる。

横濱教誌

四月中の當地の法筵は左記の如くであつた
四日 夜 神奈川區藤原町西村氏方にて「大關を日輪破る」磯部先生
九日 夜 磯子町高橋氏方にて。小西師の御講話。
十二日 夜 神奈川區鶴屋町京田氏方にて
十六日 夜 中區南太田の川又氏方にて
二十日 顯本院梵行日法信士(故會員齋田巳代治氏)の一週忌に相當したので、齋田氏方に磯部先生始め有志參集、唱題廻向をした。
廿二日 夜 中區千歲町高田氏方にて「佛

して我が統一團に何かお望みが記されて居たようだが、宮原氏も病後は矢張りおつむりも普通でないらしいからこの度は不問に附して置くが、本末を顛倒されぬように、而して御自身しつかりと御静養御健勝を祈る。二回も同一雜誌をお送り下さつた御厚意を感謝して此の機會に一言させて頂く。

吾等は國際聯盟から離脱した大日本帝國の現状の如き有様にある、これから獨々自由の天地に其の法戦を展開すべきである。

そこで御法難會の法要が講堂に於て皮修された後、左の順序に講演は進まされた。

開會の辭と四恩抄拜讀

磯部滿事氏

日蓮聖人の宗教

中村清一氏

發菩提心

梶木顯正師

御法難會の夕

和義義見師

萬古光被と開會の辭

小西日喜師

時刻は十を報じた。當日 釋上人、鈴木夫人や吉川氏夫妻、吉越夫人等珍らしいお顔が見えた。

法華經講座 例會は毎週木曜日午後七時より八時三十分迄規則正しく、小林先生に依つて開講を進められてゐる。只今は如來神方品の

二本松教信

四月十七日 夜 於蓮華寺題目講修行。

同日 十九日 午後一時五十七分戰死者七基二本松を通過し故郷に向ふ因つて出迎ひ讀經す。

同日 廿八日 の開宗會の聖日を卜して蓮華寺開堂式を午前十時より大僧正兼川日堂親下

大導師のもとに中原通應、渡邊日新、山主中島元道、笹本春義、玉島英龍、木村教信

菅野顯孝各上人に依りて舉行せらるる當日晴天にて檀家信徒の參詣も非常に多く式は莊嚴々肅のもとに三寶禮に始まり讀經、中島

山主の奉告文、總代人代表若本繁氏の式辭、大導師の燒香、一般の燒香等三歸禮にて退

座。それより工事報告に移り、中島山主の挨拶、會計よりの報告、山主より贊狀贈呈

山本總代人の謝辭、祝詞、木村管長親下を始め各部長、磯部滿事先生等の全國、朝鮮滿洲各地よりの祝電數十通あり、盛會裡に終了す。午後二時より講堂に於て兼川親下

中原權齋正の御親教あり、霞ヶ城下の教田は法雨に浴し感激のもとに散會せり。

布哇教信

ホノル、市ヌアメ街法華經寺にては四月廿八日、日蓮聖人立教開宗記念日なるを以て午前四時出發ココベッド迄行列し、旭日の昇天を拜して記念法要を皮修し、一同記念撮影をした。尙來る五月二日街頭修業の折「立教開宗の眞意義」の題下でベトナムア街アラ街突當りに於て小林日種師講演を爲す由。

(昭和十、四、廿九、布哇報知)

新刊紹介

岩野少將の「日本國體學提要」が今度四谷書文館から出版された。

はしがきにもあるやうに「日本歴史有りのまゝから組立てた思想で宗教哲學などを用ひて捏ねまはした説明よりも、寧ろ常識的によく要領を具備し」てゐる。従つて我御國體の如是相が氏獨特の一對二でよく開明されてゐる。唯聖徳太子の佛敎觀が果して氏の説の通りであるや否やは研究に値するものと思ふが、所謂本書は提要であつて詳論でないから、時機相應の好著として各位の御一覽をお薦めする。

(本部取次定價二十錢送料二錢)



『皇道と日蓮主義』に對する世評 (其二)

本團講師河合眇明氏が先に心血を注いで『皇道と日蓮主義』を著し、以て本團創立の恩師たる故大僧正聖應院本多日生上人の多年慈教嚴訓の成果に據れる師資の法統を高調して、本團の大理想を世に問ふや、有縁無縁既知未知の士君子より種種なる讚許を寄せ來られた。今その一端を茲に提げることとする。尙引續き同書の事に就ては、更めて記さるゝ所があるであらう。

昭和九年十二月廿五日

安井正太郎

河合 眇 明 様

拜啓先日は御遠路御來訪被下難有奉存候。殊に貴著『皇道と日蓮主義』御惠贈に預り千萬忝く厚く御禮申上候。爾來御繁忙の事と御察致し居候。小生も俗用のため、例により讀書の時間少く、漸く一昨日貴著閣下、左に感想の一端を申上候。全篇を通じて熱烈なる氣概の横溢せるは敬服致候。就中第六節本佛の人格實在と感應の妙義及第七節本佛を根源とする文化の統一は本書の中心を形成するものとして、最も感銘深きを覺え申候。仰せにては、初心者にも容易に了解し得るものゝ如かりしも、小生の感ずる所にては却て相當研究せる者

に對する、好箇の指針と存申候。從て初心者はそのあまりに雄大深遠なるに壓倒せらるゝ氣持を起すに非ざるやとも思はれ申候。恰も身は雄大にして壯麗なる天下の絶景の裡にあり乍ら自己の踏み進む途は崖鬼たる巖山を攀登するの感有之べしと存申候。

尙ほ間々誤植あるは他日再版の際御訂正相成らば完璧たるべしと望蜀の念を起し申候。いづれ新春ともならば更に拜芝を得て法悦に潤ひたしと待望致居候。 敬具

拜啓

茲に昭和十年の新春を迎へ候へば、吾等益々異體同心之聖訓を奉戴し法國冥合、國浮統一の大願業に向つて邁進致度候

然る處、此の度

貴講師には

皇道と日蓮主義を新刊せられ御高著壹卷御寄贈を辱うし、御厚志洵に感謝に不堪候。

貴師平素之活躍と御高著により、恩師本多親下の御満足如何ばかりか、定めし寂光淨土に於て微笑せられ居候事を信じて不疑候。先は御禮申上度如斯に御座候。 敬具

一月二日

有 田 安 道

河 合 眇 明 殿

凍雲空を壓し、朔風響を絶し只涸寒の肌に徹するを覺ゆるの候益々御清昌奉賀候。 陳ば御著

『皇道と日蓮主義』御贈被下早速拜讀致候處、皇道に就ての適切なる説明を加へ、引て日蓮主義に合致する所由を懇切丁寧に説かれたるは、誠に老生の意の得たる處にして、欣喜且つ敬服の至に存候。

益々御精勵、國の爲め、人の爲め御盡力被下様願度候。 御厚意難有謹而御禮申上候。 合掌

一月十一日

河 合 眇 明 様

侍 史

一 井 九 平

河合大兄全く大兄には其後御無沙汰、實は大兄が今日この著書あるを見て、小生は感激無量。大兄の爲法爲國、只處激の外無之、今日迄大兄の存在を知らざりしを恥入申候。

思へば中學時代既に上人崇拜たりし大兄へ今日迄御無沙汰の段、幾重にも御容赦願入候。目下小生は國境に於て大法廣宣に餘念無く邁進申居り候處、聊か、より以上の精神修養の

意味に於て、百日間の苦修練行を致し居り候

都合上出行後一度御面接致し度くも、果して出來申すや否や？不安に存じ申候

目下苦練中、著書も未讀、何れ出行後ゆつくり熟讀仕可、各所一部分宛拜讀する處、實に感銘する處多く、全く大兄の人格には敬服仕り候

何れ御面接の機を得れば快談仕可、目下修行中、本日は只簡單乍ら御謝辭を申述べ御著書に對し絶大の敬意を表し申候筆末に臨み、大兄の御健康を御祈申上候

一月十二日

中山にて 黒田秀明合掌

河 合 大 兄

御 侍 史

拜啓、二三日來寒氣益々加はりましたが、お障りございませんか。

さて昭和十年新春の意義深き御年玉として賜つた『皇道と日蓮主義』を今日やつと讀了致しました。最初の二頁からあらはれる先生の信仰の熱情は、たとへ暫くの間でも、直接先生の人格に接し、教を受けた私として、其後ともすれば冷やかな知にのみ走り、實踐を忘れんとする思惟と、經驗とが各獨立のものにならんとする私にとつて、一入強く胸に應へたのであります。全文を讀み終つて再び巻頭に立ち返り、

序文を見ました。井上閣下の「高き尊皇愛國の至誠と深き崇神信仰の信心より湧出し來りて、言々愛國の響があり句々信仰の涙があります。銅々として諷諷すべく潜々として著者と共に泣くべきものがあります」とは他の何人と雖本書を手にするものにして、必ず痛感するところでありませう。先生の人格から迸る強き力の迫り來るを感じます。これも皆本佛の御授威に感佩すればこそでありませう。私は深い／＼反省の中に引き入れられます。著書のあるものは直接原稿を通じて又他の部分は先生の口授を受けたものであります。その時の先生と自分とを心眼に畫いて、更に又新たな活力を與へられたものであります。先生、感謝致します。感激して居ります。もとより私は法華思想の秘奥に達するまでには道尙遠く幾多の艱難が横はつて居りませう。而も先生の如き雄且大なる氣魄は未だ持ち得ずとするも、出來得る限り努力する覚悟であります。餘暇は少いのです。一寸でも多くを欲すれば睡眠時間を減するより外にはありません。しかし他に職務あるを奈何せん。目的に達する捷徑を合理的に現在をよりよく能率的に利用する以外に道はありません。

御著の内容に就いては私のよく云々するところではないのであります。最近の社會狀態から筆を起し、皇道にその根柢を與へ、日蓮主義の最奥の言ひ難き神祕にまで及びたる深遠なる講想に比して割減に割減を重ねた跡が特に其間の事督

を目的のあたり拜察した私には見受けられます。勿論、論理過程の上に於てのことではありません。例へて申せば十界を括弧の中に説明された如きです。先生自ら「詳細は後日に割愛せなければなりません」といはれた部分の一日も早く世に出でまさんことを而して思想の根柢を失ひ、波のまにまに漂ふが如き人士に、又一分を悟り、更に精進せんとする我々の爲に裨益せんことを期して、お待ち申して居ります。先生にも説かんとして説き及ばし得ざりし部分に對する不満は、私ごときの思ひ及ばざる點に於て、多々ございませう。しかし暗示に富める力の文章は法華經の如何にして卓越なるかを悟らしめ、讀者をして、發憤奮起せしむることは、信じて疑ひませぬ。佛教復興の雄叫びの中に先生の御力作が、一人たりとも多くの人々の手に互り、而して同志の數に入られんことをさすれば皇道と日蓮主義出版の大半の目的は達せられ、又更に、後日説かんとするものゝ序論となるものと推察する次第であります。先生の意義深き處女出版を、心から慶祝すると共に、失禮にあたる點も御寛恕下さるやう俯して御願するものであります。

昭和十年一月二十日

河合 妙明 先生

增 井 昇

寄附金維持及閱費誌料領收

(自四月二十一日 至五月二十一日)

一 金貳圓五拾錢也	滋賀縣 外池 ワニ殿	一 金壹圓也	東京 小峰 豐子殿
一 金 五圓也	東京 山田 英二殿	一 金四圓四拾錢也	大阪府 渡邊 登代殿
一 金貳圓貳拾錢也	愛知縣 增井 昇殿	一 金 參圓也	東京 竹内 文治殿
一 金壹圓貳拾錢也	東京 片岡 勝次郎殿	一 金貳圓貳拾錢也	大阪 小田 末治郎殿
一 金貳圓五拾錢也	大阪 小澤 珪殿	一 金貳圓四拾錢也	福 島 菅野 康太郎殿
一 金貳拾圓也	臺 中 松輪 妙明殿	一 金 參圓也	大 阪 清原 淺次郎殿
一 金 六拾錢也	大阪府山乃神傳道閣殿	一 金貳圓貳拾錢也	釜 山 池田 金作殿
一 金 參圓也	東京 渡邊 清吉殿	一 金貳圓貳拾錢也	名古屋 坂野 千代殿
一 金壹圓貳拾錢也	愛知縣 中村 新次郎殿	一 金貳圓貳拾錢也	東京 吉越 重次郎殿
一 金貳圓貳拾錢也	千葉縣 木村 日香殿	一 金四圓四拾錢也	横 濱 遠藤 貞次郎殿
一 金四拾圓也	東京 沼部 彌太郎殿	一 金壹圓貳拾錢也	東京 川奈 錠作殿
一 金貳圓貳拾錢也	名古屋 大八木 義雄殿	一 金 參圓也	大 阪 高須 謙三殿
一 金貳圓五拾錢也	福 島 佐々木 伊太郎殿	一 金 參圓也	同 中 原 通應殿
一 金 五圓也	大 阪 徳永 蕉園殿	一 金 五圓也	大 阪 水津 傳七殿
一 金貳圓貳拾錢也	富山縣 龜田 秀之助殿		同 村 田 よし子殿
一 金貳圓五拾錢也	横 濱 青柳 榮一殿		東京 田中 峰太郎殿
一 金貳圓貳拾錢也	東京 田村 廿三郎殿		
一 金貳圓貳拾錢也	青 森 五味 季六殿		

右難有入帳仕候也

財團法人 統一團會計

念 告

本誌の紙數増加と共に製本にも郵送にも經濟膨脹ですから、誌料は前金にお願致します。
正團員の團費は誌料と混同せぬやう年額金貳圓五拾錢ですから乍恐縮滞りなきやう御拂込願います。
(團員各位は其特權を御利用下さい本多上人著書は特價の一割引で差上ります)

財團 統一團 法人

海軍造船少將 岩野直英著

日本國體學

定價二十錢
送料二錢

わかり易く おぼえ易い 是なら明徴

著者曰く——特長一部分のみ力説しても明徴を期し難い。私は必要且つ十分なる國體要素を擧げて構造形状實質發育及び力用を説きます。だから容易に概念を得るのです。

發行所 晋文館

東京市四谷区内藤町一
振替東京六二二番

取次所 日蓮主義統一會館

東京市小石川區音羽町六丁目
振替統一開口座へ

クオン、カラー

新案特許 176867
179231

詰襟用カラー(セルロイド芯入)

特長(衛生) 三拍子揃ひ 特價拾錢
便利(經濟) 送料貳錢

衛生 夏は汗を吸取り冬は肌ざはり爽やかにして皮膚をいたため常に襟元の美が保たれます。經濟 本品は低廉にして永久型の崩れぬ製法にて従來のカラーと異なり洗濯屋へ出す費用と手数を省き御家庭で簡単に洗濯が出来ます。便利 時代の要求により生れたクオンカラーは洗濯簡易ですから二三本あれば二年中間に合弁。

東京市四谷区内藤町一番地

クオンカラー製造發賣元

山田商會

電話四谷四九二二番
振替東京六二二番

警視廳各學校御用、三越、三省堂
一流洋品店にて發賣

◎洗濯の仕方、一時間位水又はぬるま湯に入れたカラーを板の上に置き、石鹸を付け、ブラシにて、このシリコネラズ水ゆすぎして其ま、乾して下さい。乾き次第直に御使用が出来ます。

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	特價	全壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	特價	全貳圓五拾錢
日蓮主義心髓		全	全壹圓五拾錢
日蓮主義精要		全	全貳圓九拾錢
佛教の本質と其價值		全	全貳圓五拾錢
法華經要品		全	全五拾錢
日生上人レコード		全	全參圓廿五錢
日蓮聖人		全	全拾錢
職部通事通釋		特價	全壹圓七拾錢
本多日生上人		特價	全拾錢
勳行作法		全	全壹圓
河合時明著		定價	全壹圓
皇道と日蓮主義		送料共	

東京市小石川區音羽町六丁目一七
財團法人 統一出版部
振替東京九四〇番

月刊「教」誌

東京市小石川區音羽町六丁目一七
發行所「教」

振替東京一〇九四〇番

定價一統	注
一冊 全貳拾錢 送料壹錢	▲御申込ハ總テ前金ノ事
半々年 全壹圓貳拾錢 送料共	▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可致候
一ヶ年 全貳圓貳拾錢 送料共	▲御購居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御通知ノ事

昭和十年五月廿四日 印刷納本
昭和十年六月一日 發行

(第四百八十三號)

不許複製
東京市小石川區音羽町六丁目一七
編輯兼 發行人 磯部滿事
印刷人 鈴木日雄
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所 都印刷所
電話高輪六〇二四番

發行所 財團法人統一團
東京市小石川區音羽町六丁目一七
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番



次 目

釋尊の降誕を慶讃して(其四)……………日生上人	心の落付どころ……………守屋貫教	法華經講話(第十九講)……………小林一郎	記事
全國遊説の記(一)……………河合陟明	○本部函報各地教信	○寄附團費誌料領收	